

## アマタブ・ゴーシュの『煙の河』論 — 阿片貿易と自由主義貿易論を巡って —

加 藤 恒 彦

### 序論

アマタブ・ゴーシュ (Amitav Ghosh) は、現在最も注目されているインド人作家の一人であり、これまで7冊の小説と1冊のノン・フィクションを出版し、数々の受賞歴を持っている。

#### アイビス三部作をつなぐもの

『煙の河』 (*River of Smoke*) (以下『煙』) (2011年) は、ゴーシュが現在取り組んでいるアイビス三部作 (Ibis Trilogy) の第二作目にあたる。第一作の『ケシの海』 (以下『ケシ』) (*Sea of Poppies*) (2008年) では、インド人移民を乗せカルカッタを出発し東アフリカ沖のモーリシャス島に向かうアイビス号がベンガル湾で嵐に襲われる所で終わったが、第二作の『煙』は、その同じ嵐にボンベイ発の阿片貿易船アナヒータ号が襲われる所から始まる。アナヒータ号は、インドで生産した阿片を積み、広東 (現在の広州市)<sup>1)</sup> に向かう途中であった。こうしてベンガル湾の同じ嵐が二つの物語を繋ぐ形は取るものの、二隻の船の積荷の違いにも明らかなように、基本的に別のテーマを持った独立した物語と言ってよい<sup>2)</sup>。

では、そもそも何故、ゴーシュは、『ケシ』と『煙』を三部作の一環として構想しているのでしょうか？ 三部作は、未だ完成を見ていないが、少なくともこれまでの展開から、一部と二部を繋ぐものとして次のことが言えるであろう。

#### 海外に自由を求めたインド人

第一部と第二部に共通する第一のものは、主人公たちが皆何らかの理由で、海外に自由を求めた人々の物語であるという点である。

第一部の主人公ディーティは、未亡人となり、亡き夫の財産を狙う叔父にサティ (死んだ夫の後を追ひ、妻が夫とともに火葬されること) を迫られ危うく殺されることを不可触民の男

カウラに救われ、夫婦として村から逃亡するのだが、カースト制度のあるインドでは決して自由にはなれないことを悟り、アイビス号でモーリシャスに向かう移民の団に紛れ込むことにより自由と新たな人生を求める。また、ベンガルの大地主ニールは、カルカッタで王様のような贅沢な暮らしをしていたのだが、イギリス商人バーンハムの罠にはまり、署名偽造の罪で一転、囚人となり、アイビス号でモーリシャスの刑務所に送られる途中、ベンガル湾でアイビス号が襲われたサイクロンを利用し、船から脱出し、新たな人生を始めようとするのである。(そしてニールは、第二部の主人公インド人貿易商バーラム・モディ (Bahram Moddie) の秘書として新たな人生を始める)。

第二部の主人公バーラムの場合も同様である。物語の分析によって明らかになるのだが、バーラムにとって広東は、彼がインドでの生活の拘束や窮屈さから解放され、自己の才能を自由に開花させ、人から認められ、かつ人生の享楽と愛を求めることができた場所でもあったのである。

### インド洋航海に媒介される物語としての三部作

第一部と第二部のもう一つの共通点は、そうした物語がインド洋航海に媒介されているという点である。だがこれはアイビス三部作に限った話ではない。ゴーシュにとってインド洋を経て東南アジアや中東・アフリカに飛躍したインド人の過去は、インドの歴史の重要な部分を占めているのである<sup>3)</sup>。

そもそも地理学的に北部を8,000メートル級のヒマラヤ山脈に、北東部を2,000メートル級のアラカン山脈によって交通を遮られていたインドにおいては、北西部のパンジャブ地域が他地域への唯一の開口部であり、古来より、そこを経て人々は、インドに侵入、侵攻してきたのである。しかし、それとは対照的に、海路は、人とモノの平和的交流に大きな役割を果たしてきた。遠くは、紀元前30世紀頃より、インドから西に向かっては東アフリカ、エジプト、アラビア半島、ペルシャに通じ、東には東南アジア、中国、日本にまで通じ、その時代の最も貴重な物品の取引を介してきたインド洋海路が存在したのだ。(榎, 2005) この海路には、「古来より伝統となっている相互性の原則がすでに存在し、支配者や君子は海外からの商人たちの商売ごとには干渉せず、また商人たちも、自分たち内部の警察的機能によって問題を起こさないことを保証していたのだ」(Chaudhuri, 1985, p.112) そして主要な港で一定のルールさえ守ればどの船も平等に扱われる平和な秩序が存在していたのである。

このような海路を通じた交易は、古来より現在にかけて、人とモノの交流をもたらし、インド人の海外展開の機会を提供してきたのであり、ゴーシュは、そこにインド文学の豊かな脈を見出した。アイビス三部作もそうしたインド洋文学の一環として捉えることができると私は見ている。

だが、インド洋交易は、近代に入りその様相を一変させていた。ヨーロッパ植民地主義の時代が訪れていたのだ。アイビス号がインド洋を経て向かったのは、かつてはフランスの植民地であったが、今ではイギリスの植民地となっていたモーリシャスだ。アイビス号自体、かつては大西洋を横断する奴隷貿易船であったが、1807年にイギリスで奴隷貿易が廃止されて以来、インド洋航路に転用されていたのである。そして1837年にはイギリスのカリブ地域における奴隷制も廃止される。それは奴隷制による砂糖生産がもはや利潤を生むビジネスではなくなっていたからである。そして、それに取って替わって大きな利潤を生みだしていたのが、東インド会社が植民地のインドで独占的に生産した阿片を広東に密輸するビジネスであった。

一見すれば奴隷貿易の廃止やカリブ奴隷制の廃止は人類の進歩のメルクマールかと思われるのであるが、実は、それは、より利益の上がる中国との阿片貿易に取って変わられたに過ぎなかったのかも知れない。そして丁度18世紀イギリスにおいてカリブとの奴隷貿易や奴隷制による砂糖の生産・販売によって大金持ちになった人々が本国イギリスで紳士として扱われたのと同様、中国との阿片貿易は後に見るように大幅な貿易赤字によるイギリスからの銀の流出を防ぐ最上の方法として国益に貢献するビジネスであり、大英帝国によって守られていた。

こうしてインド洋貿易の世界に、イギリスを始めとする西欧植民地主義の支配が広がるという新たな歴史的舞台を背景に、ボンベイを出たアナヒータ号は、イギリス東インド会社によってインドで生産された阿片を積み、インド洋を経て中国の広東に向かうのである。

このようにして、一部と二部の物語の土台としてインド洋航海を据え、そこに歴史的に展開してきた海外に自由や新天地や利益を求めるインド人たちの物語を描いているのである。そして、第二部の大きなテーマとしてゴーシュが取り上げているのが、中国との阿片貿易なのである。だが、『煙』が描いているのは、阿片貿易のみではない。

### ロビンが語る広東の植物と広東画壇の物語

その一つは、ヨーロッパにはそれまで知られていなかった東洋の植物発見・採集の物語であり、カルカッタ植物園のフランス人生物学者の娘でカルカッタ育ちのポーレットが、モーリシャスでイギリス人の植物学者フレッチャーと出会い、ヨーロッパ人にはまだ知られていない広東の植物の採集、とりわけ一枚の絵に描かれた不老長寿の薬草ともいわれる椿探求の旅にでるという形で描かれる。

だがポーレットは、外国人女人禁制の広東には入れないため、香港島にとどまらねばならない。しかし、広東には、ポーレットのカルカッタ時代の幼友達で、実在のイギリス人の中国画の巨匠ジョージ・チナリー (George Chinnery, 1774-1852) がインド人女性との間にもうけた混血児の画家ロビンがいて、香港島のポーレットに書簡を送る。そしてロビンは、この書簡を通じ、広東の植物情報のみならず、広東画壇の歴史や事情について語るのである。特に、興味

深いのは、チナリーの "Portrait of a young Eurasian lady"<sup>4)</sup> に描かれたインド人と中国人の混血の美しい少女の肖像画にまつわる悲しくも魅力的な物語であるが、ここでは割愛せざるを得ない。さらに、ロビンは、阿片貿易を巡る広東の外国人居留地の緊迫した様子の語り手の一人として、先に紹介したニールとともに登場する。

### 阿片貿易を巡る物語

『煙』にはこのように幾つかの魅力あるテーマが織りこめられているのであるが、最大のテーマは、イギリス人による、インド人を巻き込んだ広東阿片貿易である。そもそも第一部の『ケン』も東インド会社によるインドでの阿片栽培・生産の犠牲者の物語から始まっていた。ディーティの夫は、かつてイギリス軍のインド兵として従軍していたのだが、その時の足の怪我の痛み止めのモルヒネの為に阿片中毒者となり、ガジプール (Ghazipur) にある東インド会社の阿片工場で働くうち、阿片中毒が悪化し職場で亡くなったのである。そしてディーティの嫁ぎ先は、ガジプールの郊外の阿片を栽培する農村であり、ディーティは、夫の遺体を受け取るために東インド会社が経営する阿片の生産工場を訪れ阿片の生産過程を目にする。その意味で、アイビス第一作は、インドでのイギリス東インド会社による阿片の栽培と生産を描き、第二部は、それがイギリス商人やインド商人によって広東に運ばれ、密売される過程を描いているとも言えるのである。

そのようなイギリス、インド、中国の間の関係は、18世紀以来続いてきたのであるが、ゴッシュが『煙』で主に焦点を当てているのは、1838年後半から1839年の6月までの広東で起きた一連の出来事であり、それを口実にイギリスは阿片戦争を引き起こすのである。

### 阿片貿易の世界史的意味と日本の近代化

では阿片戦争とは何故起こり、どのような世界史的意義を持っているのか？ 19世紀に入るとイギリスでは、「お茶の時間」に象徴されるイギリス的生活様式が庶民の間にも広がり、その結果、当時世界で唯一の茶の生産地中国からの茶の輸入が増大した。しかし、イギリスは、お茶に相当する輸出品目を持たなかったが故に、大量の銀の流出に悩み、それを解決する手段として、植民地のインドで生産した阿片を中国に売りつけた。清は、1729年以来、阿片の販売への禁令を出し、1796年には禁制品として輸入を禁止したが、むしろこの時期以降、輸入は激増し貿易バランスを逆転させ、イギリスやアメリカの貿易商に莫大な利益をもたらした。(陳, 1971, pp.31-34)

イギリスによる阿片の輸出は、清に阿片中毒者を蔓延させたばかりでなく、清に銀貨の流出による銀の不足と銀の価格の高騰をもたらし、銀価に基づいて決められていた税金をも高くし、民衆の不満と中国の国家財政の貧窮をもたらす。そうしたなかで、清の道光帝も阿片貿易の禁

止に本気で乗り出すことに意を決し、清廉潔白で信頼のおける高級官僚林則徐を特命全権大使として広東に送り、阿片を押収し、処分した。(陳:1971, pp.40-41)

しかしイギリスは、この事件を口実に清朝に軍事攻撃をしかけ、清朝を降伏させると南京条約(1842年8月)を結び、没収された阿片への賠償のみならず、香港のイギリスへの割譲と上海を始めとする新たな港の開港を認めさせた。これが第一次阿片戦争である。

イギリスはこの大義なき戦争に勝利することにより、産業革命によって生産された物品を中国で売りさばく権利と中国貿易の拠点を確保し、さらに、後のアロウ号事件による戦争(第二次阿片戦争)の結果、1858年天津条約を結び阿片の輸出さえ公認させたのである。こうして阿片戦争は、イギリスが、科学技術の発展や産業革命による経済の工業化を背景にした圧倒的軍事力によりアジアの超大国中国に対する理不尽な要求を押し付けることができたという意味で、西と東の世界史的力関係を逆転させ、「東アジアの近代史が開かれたのだ」(陳, 1971, p.ii)しかし、自国を世界の中心とする中華思想に阻まれ、ヨーロッパにおける新たな経済的・軍事的展開に無関心であった清朝では、阿片戦争に敗北したことへの反省から「洋務運動」が起こるが、辛亥革命によってようやく近代化の道を歩み始めたのはそれから半世紀後のことであった。

欧米のアジアへの接近により敏感に対応したのは、むしろ海の向こうの日本人であった。第一次阿片戦争の顛末は、長崎の中国商人を通じて江戸幕府の役人にも伝えられていたのだ。そして、外国に学び外国を制することを提唱した魏源による『海国図志』(50巻)(1842年)も日本に伝えられていた。当時、「外国のことを知りたい知識人にとって、この書以外に参考にするべき資料がなかった」ため、日本でも、数年のうちに「それを刊刻するもの20余種」に達したという。(陳, 1971, p.201) ゴージュも参考にした学術誌的な *Chinese Repository* もその翻訳版が『海国図志』の付録「マカオ月報」として付けられていた。(陳, 1973, 風雷編 p.81) 実は、魏源にこの本を書くことを依頼し、諸資料を渡したのは、阿片を押収・処分し、イギリスとの戦争という事態を招いたとし、辺境の地ウイグルに左遷される途中の林則徐であった。(陳, 1971, p.200-201) そして1853年のペリーの来航と、翌年の開国により最初の総領事となったハリスは、江戸幕府との貿易協定締結交渉の過程で、日本のなかに渦巻く攘夷論に対抗する為に、中国で起きていた第二次アロウ号事件におけるイギリスの乱暴なやり方を交渉の場で最大限利用し、イギリスが次に日本にやってくる前にアメリカと協定を結ぶことの有利さを説いたのである。(Dower, 2008)

こうしたなかで当初、開国を巡る立場の違い故に犬猿の仲であった薩摩と長州は、アメリカとの貿易協定締結後、それぞれイギリスとの交戦の経験から討幕による近代化の必要を理解し、坂本竜馬の仲介により薩長同盟を組み江戸幕府を倒し、明治維新を実現する。こうして日本は、かつては世界の中心であると豪語した中国がイギリスの武力の前に屈服する姿を見、同じアジア

アの一国としての危機感を持ち、自らの西洋体験に基づき、それを強烈な西洋化=近代化への民族的イーススへと転化したのである。

### 阿片戦争前夜の広東を外国人居留地の側から描く意味

阿片戦争は、このように、当時の日本人を近代化に向けて駆り立てることになった重要な事件である。しかしゴーシュがこの小説の主な舞台として選んだのは、その戦争に先立つ局面、すなわち清王朝の道光帝により阿片貿易廃絶の特命を受けた林則徐が広東に派遣され、広東の阿片貿易業者やイギリスの総領事エリオットと対峙する局面である。そして、この局面を描くためにゴーシュが取った方法は、中国政府側とイギリス人を中心とする外国人居留地側の緊迫したやり取りを、外国人の立場から描くことであった。これによってゴーシュは、次に見るような魅力あるテーマを展開することが可能になったのである。

第一に、この局面は欧米列強の帝国主義的政策に対する中国外交の輝かしい勝利の局面だったのである。林則徐は、広東到着後、阿片貿易業者やイギリスに対し、国際関係論の立場から道理の通った批判を行い、阿片商人に阿片の放棄と今後阿片を持ち込まないという誓約書への署名を求め、彼らが抵抗すると、外国人居留地を軍隊によって取り囲み、孤立させ、武力を行使することなく阿片の積荷を押収・処分し、中国人から見れば、胸のすくような見事な勝利を収める。

それが一時の勝利に過ぎず、イギリスに宣戦布告の絶好の口実を与えてしまったというのも事実である。そして阿片戦争の勃発とともに、林則徐はイギリスへの融和策を廷臣から進言された道光帝によって罷免されるのである。しかし、当時においてさえ、「英人のあいだでも、敵として歯ごたえのある林則徐は尊敬されていた」という。(陳 1971, 182-183)そして大局的に見れば、林則徐の闘いは、「阿片戦争」をイギリス史上の汚点だ、とする歴史的評価を生み出す大きな力となったのである。ゴーシュは、阿片貿易商たちや、その背後にあるイギリス総領事のエリオットに立ち向かう林則徐の道理が通り、かつ毅然とした姿を見事に描くことにより、イギリスの大義の無さを浮き彫りにしているのである。

現在、中国が大国となって国際舞台に立ち現われ、東シナ海や南シナ海において強圧的態度を取ることによって周辺諸国の安全や平和にとつての脅威となっている時期であるからこそ、中国自身も教訓とすべき興味深い歴史的時期とも言えよう。

陳も小説『阿片戦争』<sup>5)</sup>のなかで、その局面も描いているのであるが、ゴーシュの描き方とは大きく異なっている。陳は、この一連の事件を主に林則徐や中国官吏、中国商人の視点から描いているのに対し、ゴーシュは、当時広東で発行されていた外国人英字情報誌 *Canton Register* や中国に関する学術的な季刊誌 *Chinese Repository*、回想、書簡、後の研究等の外国人の側の資料や中国の官報等の資料を丹念に読み込むことによって、(Brzeski, 2012) 外国人

コミュニティ、とりわけ、貿易商の「商業組合」内部で行われた林則徐の広東への接近と、到着後の彼の命令に対する議論や動きを詳しく再現している。そうすることによって、ゴーシュは、外国人阿片商人たちに与えた林則徐のインパクトを見事に描くことができたのである。

第二に、ゴーシュは、出来事を外国人貿易業者の側から描くことによって、外国人貿易業者の間で行われた阿片貿易そのものの是非を巡る議論を正面から描き出すことができた。実は、外国人コミュニティは、一枚岩ではなく、阿片貿易推進派と少数ではあるが強力な批判派に分かれており、激しい意見の対立があったのである。

阿片貿易推進論の論陣を張った貿易商人は、皆イギリスのスコットランド出身で、エディンバラ大学でアダム・スミスやマルサスから学んだ最初の弟子の世代に属し (Brzeski, 202) 阿片貿易を「自由貿易論」の立場から擁護したのである。だが、彼らはアダム・スミスの名を借り、実はアダム・スミスが『国富論』(1776年)に先立つ『道徳感情論』(1759年)で、「弱さ」や「自己欺瞞」によって「胸中の公平な観察者」の非難を無視しようとする」態度として批判されていた類の人々である。(堂目, 2008 p.102)

他方、ゴーシュは、彼らの「自由貿易論」を鋭く批判する論客として、アメリカ人貿易商のチャーリー・キング氏を『煙』のなかでは大きく扱っている。

阿片貿易を批判した欧米側の論者として有名なのは、アメリカの宣教師 E.C. ブリッジマン (Elijah Coleman Bridgman) であった。ブリッジマンは、オリファント商会の要請で、アメリカのプロテスタントの宣教師として初めて1830年に中国に派遣され、中国語を習得し、英文の中国研究の学術的季刊雑誌 *Chinese Repository* を創刊・編集し、アメリカによる中国研究の先駆者となり、阿片貿易を批判する論考を *Chinese Repository* に掲載し、アメリカが当時の中国から好意的に見られる切掛けを創り、初期の米中関係の形成にも影響を与えた人物であった。(Lazich, 2006) 陳舜信の小説『阿片戦争』にもブリッジマンは登場する<sup>6)</sup>。しかし、宣教師であったブリッジマンは、「商業会議所」での論争に直接かかわることはできなかった。そこでゴーシュが阿片貿易反対論者の中心に据えて描いたのは、広東に拠点を置くアメリカのオリファント商会 (Olyphant & Co.) の貿易業者で、敬虔なキリスト教徒のチャーリー・キング氏であった。実は、ブリッジマンを招聘したのもオリファント商会であった。(そしてチャールズ・キング氏は、モリソン号事件として日本史でも知られている事件の当事者でもあった。すなわち、キング氏は、オリファント商会所有のモリソン号で1837年に日本人漂流民7名を乗せ、日本との交易を開き、合わせてキリスト教を布教しようと意図し鹿児島湾や浦賀湾に現れたが幕府の砲撃を受け、撤退した人物でもある)<sup>7)</sup>。

そして阿片貿易擁護論と批判論の激しいやりとりを通じて浮かび上がってくるのが、資本の自由な利潤追求活動と道徳性や社会への責任の問題を始めとする、資本主義が続く限り問題となる古くて新しい論点である。従って、本論では、ゴーシュが描いている阿片貿易を巡る論争

の整理とその評価を論じることになる。

第三に、ゴーシュはこの局面を外国人居留地の内側から描くことによって、陳の『阿片戦争』の視野には入っていなかった存在、インドのパーシ (Parsi) (拝火教徒) の阿片貿易商に焦点を当て、彼を主人公に据えた物語を描くことができたのだ。パーシとは、かつてイスラム教徒の征服の時代に迫害を受け、ペルシャからインドにやってきた拝火教徒の人々で、少数ではあるが、商業や金融業において目覚ましい活躍を見せ、東南アジア地域にも広がった人々である<sup>8)</sup>。

阿片貿易商バーラムは、ボンベイと広東を往復する生活を何十年も経験するなかで外国人居留地での生活にボンベイでは得られなかった新たな人生・自由・愛を見出していたのである。しかし、今回の阿片戦争前夜の広東への航海は、バーラム最後の航海となり、物語の最後では、外国人商人のなかで唯一入水自殺を遂げることになる。何が彼を自殺にまで追いやったのか？それを明らかにするのも、本論の課題の一つである。

第四に、ゴーシュは、18世紀中盤から阿片戦争の時期まで清朝が外国との貿易港として唯一開港した広東の外国人居留地そのものを第二の「主人公」として思入れを込めて描いている<sup>9)</sup>。外国人居留地は、1858年には焼き払われ現存しないのであるが、ゴーシュは、その特異な魅力を、広州やイギリスのロンドンの『グリニッチ海洋博物館』に豊富に保存されている回想録、日記、書簡集、そして沢山の絵画を基に再現しているのだ<sup>10)</sup>。広東の外国人居留地は、日本の鎖国時代の出島に相当する窮屈な所なのであるが、それが外国人商人、とりわけインド人商人にもっていた特異な解放感や魅力を明らかにすることも本論の課題である。

このようにゴーシュは、阿片戦争に先立つ広東での事件に焦点を当て、それを外国人居留地の内側から描くことにより、これまで述べてきた4つの魅力溢れたテーマを展開することができたのである。そして、それらのテーマは、作品の流れのなかで有機的に関連し、相互に作用し合っているのです。個々に切り離して論じるのではなく、物語の流れと関連させながら論じて行くことになる。

## 本論

この小説の主人公は、ボンベイに拠点を置く阿片貿易商、バーラム・モディである。彼は、阿片貿易を巡る広東での事件の後、小説の最後で、香港島沖に停泊するアナヒータ号から入水自殺をする。それは、広東の事件が彼のそれまでの人生に対してもっていたインパクトの結果である。従って、彼が何故死なねばならなかったのか、という問いに答えるためには、1838年の9月に大量の阿片をアナヒータ号に積み、彼にとっては最後となってしまった航海に出港するまでの彼の人生を知る必要がある。



## バーラムの過去

バーラムは、インド人貿易商のなかで中国貿易の経験にかけては他の追従を許さない存在で、ボンベイのミストリー兄弟会社の貿易部門を1人で立ち上げ、それをボンベイ一の貿易会社にした男である。だが、ミストリー兄弟会社は、もともと造船業に特化し成功した会社であり、投機的な要素をもつ貿易部門を発展させてゆくことへの反対意見もあった。そうしたなかでバーラムを支えたのは、彼を家族の一員として受入、貿易部門を任せてくれたミストリー家の家長、ラストミへの忠誠心であった。というのは、バーラムは、最初から恵まれた境遇に育ったわけではなかったのだ。(RS, pp.42-43)

バーラムの家族は、グジャラート州の海岸に面した町の出身で、祖父は藩王国の宮廷御用達の織物業者として裕福な暮らしをしていたが、過剰な投資で失敗し、大きな借金を作ってしまったのだ。律儀な性格の祖父は、借金返済に誠心誠意取り組んだ挙句、一文無しになり、家売り、村のはずれの小さな家に引越さざるを得なかった。しかしそれが祖父と父親の健康を害し、二人ともバーラムがパーシの洗礼を受けるときを見ずして病気で亡くなってしまったのだ。しかし幸いなことに彼の母親は、針仕事という実入りの良い技術を持っていて、家族の気の毒な状況の噂が世間に広まると、母親への注文がたくさん舞い込むようになり、バーラムに基礎的な教育を受けさせることもできたのだ。そして針子としての彼女の名声はボンベイの最も富裕なパーシの企業家、ラストミの耳にも届き、娘の結婚式のショールの注文が舞い込むことになった。というのも、両家は元々同郷であり、全盛時代のバーラムの家族は、小さな家具製造業を立ち上げたばかりのミストリー家を大いに助けたこともあったからである。(RS, p.43)

ミストリー家は、元々は、家具屋であったが、副業として営んでいたボート造りが成功し、本業を追い抜き、東インド会社から大口の注文が入り始めるとボンベイに移り造船所を構えたのである。ラストミは会社を引き継ぐと、精力的に働き、会社をインドで最も成功した企業へと導いていたのである。そしてその娘がボンベイのコラバの最も金持ちの商人の長男に嫁ぐことになり、その花嫁衣装の注文をバーラムの母親が請け負うことになったのだ。(RS, p.43)

しかし、花婿は、結婚祝に取り寄せたアラビア産の馬の試し乗りで落馬し、不幸な死をとげる。そして縁起の悪い花嫁という噂がたち、娘にも結婚相手が現れなかったのである。そこで父親は、故郷に結婚相手を求める。ラストミは自らバーラムと会い、貧しい育ちや無骨な振舞いにもかかわらず、必至に生きようとする情熱が気に入り娘の婿に決めたのである。ただし、独立した家を立ち上げるだけの金も見込みもなかったので、ミストリー家に移り住み、家族業に入るという条件がついていた。(RS, p.44)

そのような因縁のある結婚であったので、バーラムは結婚生活に多くは求めず、妻も、妻としての型どおりの義務を滞りなく果たし、やがて二人の娘をもうけたのであった。こうして二人の間に情熱はないものの、また争いもなかった。

問題は、むしろ他にあった。貧しい境遇から娘婿として大金持ちの家に入るという立場故に、バーラムは、ミストリー家のなかで肩身が狭かったのだ。屋敷には妻の兄弟・親族が住んでおり、貧乏人で田舎者のよそ者に財産を奪われるのではないかと猜疑の目が光り、警戒怠りなかったからである。(RS, p.45)

そのような彼がミストリー一家に受け入れられる為には造船業に関する技術や能力が必要であったのだが、バーラムには、そのような才能は皆無であった。バーラムがもっていたのは全く別の才能であった。彼の才能は人を扱うこと、最新の情報を絶えず手に入れること、危険やチャンスを判断することであった。

やがてバーラムは、西インドと中国との貿易が急速に発展しており、それに参加すれば、利益を上げることができるだけでなく、ボンベイの家庭から逃れ、旅をし、興奮を求めることもできることを知る。(RS, p.47)

最初家族の反応は否定的であった。彼らはビジネスに関しては堅実で、投機的なことを嫌ったのだ。しかし、バーラムは、必至に彼らを説得する。すなわち、今では、阿片のように、かつては痛み止め以外には一見何の役にも立たないと思われたものを人々は欲しがり、一度吸い始めると止められなくなり、市場がどんどん拡大して行くのだ。だからこそ東インド会社は、阿片取引を独占しているのだ。幸いなことにボンベイでは我々も取引に参加できるのだから、利益の一部をいただいて何が悪いのか？どこの造船所も小さな船団を持っており、それを海外貿易に従事させている。ミストリー社もそうする時ではないか？他の会社があげている大きな利益を見るがいい、と主張したのだ。(RS, p.48)

それでも義父は容易には納得しなかったが、ある日、バーラムは、一度中国へ行くチャンスを与えてもらえればあなたの期待に応えることができるでしょう、と断言し、許しを得たのだ。そして最初の航海で家族も驚くような結果をだすことができたのだ。だが、バーラムの成功は、かえって妻の兄弟たちの彼に対する警戒心を一層高めただけであった。何故なら彼らには父親が今までにも増してバーラムに頼るようになったと思ったのだ。そのことをバーラムは母親に相談するが、母親は、それは「飼い犬に噛まれる」のを恐れているからだよ、と昔の諺で簡単に説明してくれたのである。(RS, pp.48-50)

だが、広東貿易がバーラムにとって持っていた意味は、単に利益を上げることではなかった。バーラムは、ファンキ・タウン（十三夷館）と呼ばれる広東の外国人居留地に何よりも心惹かれたのである。

ファンキ・タウンは、「奇妙に窮屈ではあるが、ボンベイの大家族の監視から逃れることのできる場所であり、女性は出入りを禁じられているが、思いがけないかたちで出会うことのできる場所」なのであった。そしてそこで彼はチャー・メイというパール河の水上生活者で外国人の衣類の洗濯を引き受けるビジネスをしていた女性と知り合い、彼女との間に息子をもうけ、

その子供をボンベイでは決して認知できないが故にこそ、こよなく愛したのであった。(RS, P.48)

ちなみに、ゴーシュは言及していないが、広東の水上生活者は、流しの音楽師部落の楽戸や乞食を生業にする細民とともに賤民として社会の最下層に位置付けられ、国民すべてに開かれていた科挙試験の受験資格を持たない人々であったのだ。(陳, 1971, p.119)

こうして、バーラムにとっての阿片貿易とファンキ・タウンは、身内以外は信用せず、よそ者のバーラムを、財産狙の危険な存在として絶えず警戒心を持って見つめるボンベイの妻の家族のもとでの肩身の狭く窮屈な生活から逃れ、自分の才能を生かした仕事をし、一種の自己実現をはかることができ、気に入った中国人女性との関係が可能な場所でもあったのだ。しかし、バーラムに貿易業者としての人生を与えた義父が亡くなった後、事態は大きな転機を迎える。

後に残された息子やその子供たちは、バーラムやその妻を無視し、自分たちだけで会社の将来について相談し、その結果、次のような結論に至る。すなわち、造船部門には将来がないと見て、造船部門を解体し、それぞれが自分の会社を設立する。そして最も儲かっている貿易部門を、値が高く売れる間に一番に売りに出す。そして今や50代となったバーラムには退職し、隠居生活に入ってもらおう。ただし、その為の金銭的な保障は十分にすると、いうものであった。だが、男盛りのバーラムにとって引退するなどということは死ぬというに等しかった。そして今や20代に達した彼の広東の息子は姿を消し、チャー・メイは死んでしまった。彼は息子の消息を知る必要があったのだ。(RS, pp.50-51)

ミストリー家が、貿易部門を売りに出すという判断をした大きな理由は、広東の情勢にあった。近く、中国の皇帝が阿片の売買を全面的に禁止するという噂がボンベイの商人の間に広まっていたからである。だが、事情にはるかによく精通していたバーラムは、それとは反対の判断を持っていた。1820年にも同様の噂があったが、バーラムはそれまで例を見ない量の阿片を売りさばき、大成功を収め、広東での今の地位を収めていたのだった。さらにバーラムは、清王朝の官僚のグループが阿片の合法化を提案するメモを皇帝に手渡したという情報も最近入手していたのだ。そうなれば、中国は税収を増やし、官僚も商人からの膨大な賄賂を懐に収めることができ、阿片への需要もさらに増大する、というわけである。しかし、そうしたことは口にださず、今回バーラムはこれを機会にミストリー一家と決別する方向をとった。つまり、兄弟たちが驚いたことには、バーラムは、彼らの提案に賛成し、同時に、貿易部門を自分に売ってくれと提案したのだ。ただし今、バーラムには貿易部門を買い上げる資金がない。だから、その資金を調達するための猶予として1年間売却を待ってくれ、と提案したのである。そして、それが受入られると、自分がこれまで築きあげてきたあらゆるコネを使い、資金を集め、次の航海に備え、阿片をインド中から買占めたのである。それは中国における阿片禁止の動きがインドでも噂となり、一気に阿片の値が下がっている時期でもあった。皆が阿片を売りに出たときにバーラムはそれを安値で大量に買い取ったのだ。しかしこれは、この取引が失敗すれば巨

額の借金を負い、破滅することを意味する。(RS, pp.51-54)

つまり、膨大な借金をして買い込んだ阿片を1年の間に広東で売りぬかない限り破滅をまぬがれない、というバーラムが抱え込んだ事情が、広東での中国とイギリスとの間の息詰まるやりとりのなかで、彼が切羽詰まって取る行動の背景なのである。

### ヴィコとゼイディン

ここで、この物語のなかで、新たに登場するバーラムの側近となる人々を紹介しておこう。ヴィコ (Vico) は、ポルトガル人の血の混じったインド人で、敬虔なカソリックである。20年前からバーラムの下で働くが、船の事務長(Purser)として乗組員の元締め的役割を果たす。ヴィコは、阿片貿易による自分の資金の一部をバーラムの積荷に投資し、かなりの資産を蓄積してきた。だから、彼が船に乗り込むのは投資した自分の財産を守るためでもあった。(RS, pp.27-28)

ゼイディン。広東へ向かう途中、シンガポールの港で再会した旧知の友人である。バーラムがゼイディンと知り合ったのは、23年前に広東から商用でイギリスに行く船のなかのことであり、途中のセント・ヘレナ島で、ワテルローの戦いに敗れ島に幽閉されていたナポレオン・ボナパルトに二人でインタビューして以来の旧友である。ゼイディンは、ナポレオンのエジプト遠征の折にフランス人の時計作り職人から時計作りを学び、時計をインド洋や南シナ海で売る商人でもある。アルメニア人だが、その家族は幾世紀にもわたりカイロに定住していた。言い伝えによれば、先祖は子供の頃にエジプトのスルタンに売られ、マムルーク(軍人)階級に成り上がり、親戚を呼び集め、職人、徴税人、ビジネスマンとなる。それ以来、彼の一族は、インド洋航海の主要な港であるアーデン、バスラ、コロンボ、ボンベイ等と取引関係を持ってきたのだ。ゼイディンは、ヒンディー語を含む幾つかの言語を流暢に喋り、情報通でもあり、それをビジネスに生かしてきたのだ。(RS, pp.60-61)

### ファンキ・タウンの魅力

そもそもバーラムを惹きつけた広東のファンキ・タウンと呼ばれた外国人居留地とは、どのようなところで、バーラムは、そのどこに惹かれたのか？

広東は、清朝が外国との貿易の為に唯一開港した中国南部のパール河沿いの港町である。禁製の阿片を積んだ外国船は、直接積荷を広東には入れず、香港島とマカオの間のリンティン島沖に浮かぶ倉庫代わりに使用されている二隻の船に下ろし、小舟でパール河を遡り広東にやってくる。広東の町の周りは幾マイルにもわたる城壁に取り囲まれ、外国人はその門のなかに入ることは許されなかった。欧米の商人たちは、城壁の南西の門とパール河の間の、幅約300メートル、奥行きはその半分の一種の「飛び地」に住むことを許されていた。その外国人居留地は、中国人からファンキ・タウンと呼ばれていたのだ。ファンキ・タウンは、パール河に沿った広

場と、それを見下ろすアムステルダム街並み風の13の「ファクトリー」(夷館)と呼ばれる商館から成っていた。

それぞれの商館はイギリスやアメリカ等、属する国ごとに分けられていた。「最大の商館はイギリスの商館であり、時計塔をもつ礼拝堂がありファンキ・タウン全体の時を刻むのである。建物の正面には庭があり、巨大な国旗の掲揚台が立っている。オランダ、デンマーク、スエーデン、フランス、そしてアメリカの商館にも旗が立っている。巨大な檣のように中国の大地に突き立てられているのである。それらの旗は広東の町の内部の官僚にも見えるようにとも言うように高くそびえている」<sup>11)</sup>。(RS, pp.170-172)

### マイダーンについて

商館と河との間の空地在イギリス人は「広場」と呼ぶが、ゴーシュは、インド風に「マイダーン」と呼ぶ。

この「マイダーン」は、パール河の船着場に着いたばかりの様々な国の商人や船員、中国人の物売り、御輿に乗った満州王朝のお役人の行列や従者を連れた中国人商人の行列等によって絶えずにぎわっている。

13の商館は、13列を成して並び、その内部は様々な建物と内庭からなっており、それぞれがアーケード状の門によってつながっている。商館と商館の間はストリートと呼ばれ、商館ごとに様々な建物や庭、路地が広がっていたのである。

ゴーシュはファンキ・タウンについて「この地上にこんなところはどこにもない。こんなに狭くて、しかもこんなに雑多で、この地球の隅々からやって来た人々が、膝を突き合わせ年のうち半年間は一緒に住まないといけないのだ」(RS, pp.173-174)と書いている。

### ファンキ・タウンのインド人商館

ゴーシュは、ファンキ・タウンの意外なことのひとつとしてインドの様々な地域出身の人々がたくさん住んでいることを挙げる。「彼らはシンド、ゴア、ボンベイ、マラバー、カルカッタ、シレットの出身だが、こうした違いはマイダーンに群がる浮浪児たちにとってはどうでもよかった。浮浪児たちは、あらゆる類の外国人の悪魔に対し、呼び名を付けていて、・・・インド人ならば、アチャなのであった。」(RS, p.174)

そしてファンキ・タウンにはアチャ・ホンと呼ばれるインド人の商館もあった。ゴーシュは皮肉たっぷりに、「もちろん、インドの国旗は立っていなかったが」と付け加えている。

ゴーシュは、インド人が他の西洋の国々と同様に商館を持つに至った歴史についてこう語る。パーラムが最初ファンキ・タウンにやってきた頃には、他のパーシ商人と同様に、オランダ商館の敷地に居候させてもらっていたのであった。それは何故か？インドの北西部、グジャラー

ト州のスラト (Surat) は、かつてインド洋交易の要所の一つとして栄えた港町であったが、「パーシ商人はオランダ商人に大いに親切をほどこしたことがあり、後にパーシ商人が中国と取引を始めたとき、今度はパーシ商人に軒を貸してくれたのだ」という。バーラムの祖父も、アムステルダムの商人と取引があり、バーラムが最初広東にやってきた当時、そのコネでファンキ・タウンのオランダ商館のなかに間借りすることになったのだ。だが、バーラムは決して、オランダ商館の建物を気に入っていたわけではない。ボンベイの商人たちのなかで一番年若いバーラムは、最も居心地の良くない場所をあてがわれていたためである。そこでマイダーンに面した最高の建物を借りないかと言われたとき、迷うことなくその申し出でを受け入れたのである。(RS, pp.174-175)

### アチャ・ホンの世界

バーラムが移った建物は、フンタイ・フォン (Fungtai Hong) と呼ばれる雑多な人々の住む商館であり、他のインド人商人たちもバーラムの後を追ってそこに移り、アチャ・ホン (Accha Hong) と呼ばれるようになったという。そしてバーラムが最初にアチャ・ホンに移って以来20年を超えていたため、いつしか、バーラムはその建物の最高の部屋を当然のこととして借りていたのである。バーラムはマイダーンを見下ろす窓際の部屋を彼の仕事部屋にし、階下に倉庫や15人のインド人の使用人用の住居や台所等のスペースを借りていた。(RS, p.175)

ゴーシュは、そこでの日常の生活のなかで形成されてきた共通の習慣について次のように語っている。

「チャイはバーラムのみならずアチャ・ホンの全ての住民のお好みの飲物であり、朝の中ごろに飲むチャイはサモサと一緒に楽しむのが習慣となっていた。サモサはマイダーンで売っていて手軽に手に入るのであった」。(RS, p.180) ちなみに、チャイは元々広東語であったという。

「ニールは、フンタイ・フォンの一等地 (No. 1 Fungtai Hong) に落ち着きつくにつれ、ここがそれ自身一つの世界を成して、独自の食事と言葉、儀式、そして日常の習慣を持っているのが分かってきたのだ。それはまるで、その住人は新しい国、未完のインド国の最初の住人のようであった」と述べている。

それだけではない、そこに住むすべての住人が・・・まるで家族の一員であるかのように自分たちの住処に誇りを持っていたのである。ニールはこれに驚いた。何故ならそれはあり得ない、ばかげたことのように思えたからである。というのは、その連中はインド各地の遠く離れた所からやってきた雑多な連中であり、10以上の違った言語を話していた。あるものはイギリスやポルトガルが支配する地域から、他のものはムガル帝国、あるいは公国の支配する地域からやってきていた。イスラム教徒も、キリスト教徒も、ヒンズー教徒も、パーシも、また、少数ではあるが、インドにいたらそのどれからも排除されていたものもいた。もし彼らがイン

ドを離れていなかったら、会いまみえることなどなかったであろう。お互いに出会ったり、話したり、ましてや食事を共にしようなどと考えることさえなかったであろう。・・・しかしここではいやおうなしにも彼らの間の共通性から逃れることはできなくなるのである。というのは、一步、外のマイダーンにでると「アチャだ」という叫び声に曝されるからである。彼らを十把一絡げに扱うことに抗議しても無駄だった。町の子供たちは彼らの間の違いなどどうでも良かったのである。とにかく彼らがインド人であることはわかったのだ。その原因が何であれ、それは逃れられない事実であった。そして一度受け入れると、それは実在性を獲得し、そして他のインド人が子供たちにどのように映っているのかが気になるのである。そしてここに住めば住むほど、絆は強くなる。何故なら皮肉なのは、こうした絆は自分たちへの過剰な誇りではなく恥の感覚によって結ばれているからである。何故なら、広東にやってくる殆どの黒い泥(阿片)は自分たちの国からやってきたことを知っているからである。そして、それから得る富がそうたいしたものでないにせよ、阿片の悪臭が他の外国人にも増して体にこびりついていないわけではなかったからである。(RS, p.181-182)

ゴーシュは、ファンキ・タウンのインド館の人間模様に、謂わば、未来の独立国家インドの未来図を見ているのである。インドにいれば、属するカースト、宗教、喋る言語、生まれた地域、そこの政治体制等の違いの為に、出会ったり、自由に語り合ったりする筈の無い人々が、広東のファンキ・タウンのアチャ・ホンでは、住居と食事や習慣を共にし、インド人と呼ばれ、誇りと同時に恥の意識を共有し、「国旗こそ翻っていないが」、まさしくガンジーやネルーが後の独立運動においてめざした独立国家インドの姿が、ある一点を除いて実現していたのである。その一点とは、いうまでもなく、イギリスによる支配の下で、中国の人々に売る阿片の最大の供給地であるという汚名であった。

### バーラムの仕事振りと商人としての才能と人柄

そして、このアチャ・ホンにおいてバーラムは優れた貿易商人としての才能とリーダーシップにおいて、人々の尊敬を得ていたのだ。

ニールは、バーラムの秘書として取引上手の手紙の口述筆記を行いながら、自身ベンガルの大地主として雇人を使って多くの取引をしていた経験に照らし、バーラムの商人としての才能に次第に賞賛の念を深めてゆく。バーラムは、多くの雇人を将棋の駒のように使うのであるが、それぞれの雇人が理解できることは自分がしていることのみであり、恐らくヴィコを除いて誰も、それぞれの部分がどのような効果を生み出しているのか、またそれが何のためなのかを知らないのだ。それを知るのはバーラムのみなのである。ニールは、そのように多くの部分を総合的に動かし望む結果を得ることのできるのは、バーラムが生まれつき持っている能力によるのだと思うようになった。そしてバーラムは商売という分野においては一種の天才だとさえ

思ったのだ。(RS, p.209)

もう一点、ニールが感心したのは、バーラムが、広く好まれ、愛されている人物であるということだった。雇人からは狂信的ともいうべき忠誠心を集めていたのだ。それは給料の支払いが良く、人の扱いが公平だったからだけではない。雇人たちは、自分たちに対するバーラムの接し方を通じ、バーラムが彼らを下に見ているのではないことがわかったのだ。だから雇人たちは、バーラムの富や贅沢な生活にもかかわらず、心の底ではいまだに村の貧しい少年の心を失ってはいないことを知っているかのようにであった。(RS, p.211)

このように見てくると、インドから遠く離れた広東のファンキ・タウンのアチャ・ホンでの生活に、バーラムが何故惹かれたのかが理解できよう。何よりも、そこは地域的、宗教的、カーブの、言語的閉鎖性に捉われない、自由で解放的な空間であり、そしてそこで自分が自分の能力を発揮し、人々の尊敬を集めることのできる場だったのである。しかし、バーラムにとって不幸なことには、アチャ・ホンは、阿片の密貿易の巣窟でもあったのだ。

そして阿片貿易商としての未来をこの航海に賭けたバーラムが再び広東を訪れたのは、道光帝から麻薬根絶の特命を受けた林則徐が広東に向かう数か月前のことであった。そしてバーラムは、広東に通じるパール河に入った瞬間から、阿片の国内への持ち込みへのかつてない厳しい取り締まりが行われているのを肌で感じたのである。

### 広東の新たな情勢

バーラムは、広東でも大きな変化を予想したが、幸い、ファンキ・タウンは通常とあまりかわらぬ様子であった。ただバーラムは、アチャ・ホンの事務所の窓からパール河の、かつてチー・メイの船があった所に目をやり、そこにもはや船がなかったとき、少なくとも自分にとっては、町が永遠に変わってしまったと思ったのである。(RS, p.184)

### バーラム、「商業会議所」「委員会」のメンバーに

もう一つの変化は、バーラムが慣例に基づきパーシの商人を代表して「商業会議所」の「委員会」のメンバーに新たに選ばれたことである。それは、インド人商人のリーダーとして認められたことを意味した。針仕事で生計を立てていた母の子供として生まれた自分が、歴代の優れたインド商人の地位に登り詰め、世界で最も豊かな商人たちを含む集団の一員となったことを意味したのだ。彼の心は誇りで高鳴った。(RS, p.184-186)

そしてバーラムを驚かしたのは、ジャディーン氏がイギリスに帰るというニュースであった。ジャディーン氏は、過去10年間、ファンキ・タウンで最も影響力を発揮してきた人物で、彼の会社、ジャディーン・マセソン商会 (Jadine, Matheson & Company) は、広東貿易の最大手の一つで、中国の阿片市場を積極的に拡大しようとしてきたのである。そして彼は、インド



でも豊富な人脈を持ち、英雄視されていた。

このニュースは、バーラムにとっては願ってもないことだった。というのも、ジャディーンは、バーラムのライバルのパーシ商人に肩入れし、バーラムには頭痛の種だったからだ。

だが、噂によれば、ジャディーンは好き好んで帰国するわけではなかった。中国政府は、ジャディーンが阿片を広東以北の港でも売ろうとしていることを知り、ジャディーンを追放しようとしていたのだ。そこで追い出される以前に自分から撤退を決めたというのである。そしてゼイディグは、ジャディーンが去ることによって、バーラムは「委員会」のなかで多くの新しい友人を見つけることができるだろうという。そしてその新しい友人の一人がランスロット・デント (Lancelot Dent) である。彼はジャディーンに対抗して広東でもっとも有力なデント商會を設立し、バーラムとともに闘ってきたイギリス人トム・デントの弟であった。(RS, p.187)

デントは、兄とは大いに異なり、喋りだすと立て板に水で、野心的で、競争者に強い敵愾心を持ち、自分よりも能力が劣るものには軽蔑的な態度を取った。しかし、ビジネスの才能には長けていた。しかし、バーラムとはあまりそりがよくなかったのだ。しかし、そのようなデントも、今や「委員会」の一員となったバーラムを自分の味方にしようとして接近してくるかもしれないという。(RS, p.189)

その理由を聞くと、ゼイディグは、今はイギリス人とアメリカ人の間で過去数か月間、阿片の密売に対する中国側の厳しい取り締まりへの対応について意見が別れているという。ジャディーン氏の一派は、本国政府の軍事力の誇示を求めているが、今の厳しい状況も一時的なものであり、じきに元に戻るというデント派の意見もあるのだという。

### 中国政府の阿片貿易への態度の変化

しかしゼイディグは、中国政府は、今度は真剣に阿片を取り締まろうとしているという。たとえば、阿片を運ぶ快速船が役人によって焼かれた後、小売人はたかをくくって船を作り直したが、再び焼かれ、何百人という阿片取引人が逮捕され、監獄に入れられたものや処刑されたものもあり、今では阿片を陸揚げするのはほとんど不可能になっているというのだ。(RS, p.189)

そうしたなかで、外国人のなかには、それまでは決してしなかったこと、つまり、自分たちの船員を使って阿片を船のなかに隠し、広東に直接輸送しようとするものもでてきたという。

バーラムは、さらにゼイディグが中国との阿片貿易について自分とは違った意見を持つに至っていることも知る。彼は、中国政府が明確に阿片貿易に反対の立場を表明しているなかで、阿片を輸出しつづけることは正しいことだろうか？というのだ。そして人々が願っていなくても、阿片のようなものを売りつけるけしからん輩がいて、そうした人間から人民を守るのが支配者の務めではないだろうか、というのである。そしていかに中国が強大な国であろうと、より強力な国々によって酷いことをされないとは限らないのだという。(RS, pp.190-191)

これを聞いてバーラムは、ゼイディグとはこの問題でこれまでのように自由に喋れなくなってしまったと思うのである。

このようにしてバーラムは、広東の阿片貿易を巡る情勢が、彼の当初の予想に反し、中国政府の取り締まりの強化によってかつてなく緊迫しているのを知る。

### リンゼイ会長主催のディナー・パーティでの論戦

「商工会議所」の現会長リンゼイ氏主催のディナー・パーティは、阿片貿易を巡る論戦が行われる最初の舞台となる。バーラムがパーティ会場に着くとデントが、かつてなく愛想よくバーラムに近づく。そしてディナーが始まる合図があると、デントはバーラムの手をとり、自分の横の席に座らせる。ここには、バーラムを自陣に取り込もうとするデントの意図が明白に表れている。(RS, pp.216-218)

やがて『広東レジストリ』という広東で出版されていた情報誌の編集者で論客のスレイドが立ち上がり、近くイングランドに帰るというジャディーンに向かい、「噂ではあなたは、詳細な戦争計画を立て、外務大臣のパルマーストーン卿に、それを進言するつもりだというのが本当か?」と聞く。ジャディーン氏は、私にはそのような影響力はないが、尋ねられたら、自分の意見はいつもりだという。スレイドは、では我々の意見を代表して伝えて欲しいとい、齒に衣を着せず、最近の事態に対するイギリス政府の対応を批判する。(RS, pp.221-223)

最近の事態とは、イギリスの阿片貿易船が中国にだ捕され、積荷を押収され、それに対しイギリス政府がメイトランド提督とエリオットを送り交渉しようとしたが、中国政府に相手にされなかった事件のことである。

スレイドの政府批判は二点に集約される。一点は、広東での貿易について一番よく知っているのは現地の貿易商人であり、生半可な知識しかない政府の役人がそれに代わって指図すべきではない、という批判であり、もう一点は、商人の利益が冒される場合には、政府はそれを保護する為に、軍事介入も辞さないという強い態度を取るべきである、という点である。

### 「自由貿易」vs「良心」

しかし、そこでキング氏が反論に立ち上がる。あなたは、イギリスのこれまでの政策を批判しているが、そのような困難をもたらした商品、すなわち阿片については何も述べていない、という。するとスレイドは、大声を張り上げながら、そもそも阿片貿易を望んだのは皇帝の友人たちであり、それを彼らが認めるまでは、そのことを認めるつもりはないという。つまり、中国が一方向的にイギリス阿片商人を責めるのは偽善であり、許せない、と責任を中国側に押し付け、自分の行為を免罪しようとする。そして、スレイドは、我々は、ただ、「自由貿易」の原則に従い、彼らが望むものを提供しているだけなのだ、と反論する。するとチャールズ・キ

キング氏は、それは良心の法則に従ってなのか？と反論する。つまり、たとえ相手が望んだとしても、人を破滅させる阿片を他国の人間に売ることには個人としての良心の呵責はないのか、と取引の道徳性という観点から批判する。するとスレイド氏は、貿易の自由のないところで、良心の自由は存在しえるのか？(RS, p.224)と言う。つまり、中国が阿片を禁制品にし、自由な貿易を弾圧しているもとでは、自由意思が働く余地はなく、従って、自由意思を前提とする良心の自由もないと論理を弄ぶ。こうして、早くも阿片貿易最大の争点、すなわち「自由貿易」の原則と阿片を売ることの道徳性を巡る争点が浮かび上がってくる。

では、そもそも「自由貿易」とはどういう文脈で生まれた概念なのかを確認しておこう。中国との阿片貿易は、当初基本的に東インド会社の独占であった。しかし、国内の産業資本家層の台頭により、個々の貿易商の自由な参入を要求する「自由貿易論」が強くなり、1834年以来東インド会社の独占体制は廃止されていたのである<sup>12)</sup>。つまり、「自由貿易論」とは中国貿易に関する東インド会社の独占への批判として生まれた。しかし、スレイドは、ここでは中国政府の外国貿易への規制や、阿片を禁制品とする貿易政策に対置するものとして「自由貿易」を主張している。買いたいものが中国には居るのだから、政府はそれに介入するべきではない、という論理である。それに対し、キング氏は、「自由貿易」一般を批判するのではなく、「阿片」を売るといふ一点に批判を集中している。中国に阿片を買って利益を得ようとするものがあるからと言って、阿片という有害なものを輸出し利益を上げるのはキリスト教徒としての良心に恥じないか？」という論点を提起しているのである。つまり、道徳論の立場から販売の自由への規制の必要を主張しているのだ。

スレイドは、アダム・スミスの弟子たちが自らの反社会的・利己的欲望を合理化しようとしてアダム・スミスを悪用している典型的なケースなのである。当のアダム・スミス自身は、『国富論』(1776年)の出版に先立ち『道徳感情論』(1759年)を精魂込めて書き上げ、人間の本性のなかには、この利己心を超える他者への共感、慈悲、正義、寛容、公共、といった徳が存在すると述べ、スレイドのような自分の利益の為には、道徳的・社会的規範を平気で蹂躪する反社会的行為を批判しているのである。

そして、後に見るように、バーラムの心のなかにはアダム・スミスが人間の本性として称揚する「他者への共感能力」が豊かに存在することが示されてゆく。恐らく、ゴーシュもスミスの『道徳感情論』を意識していたのであろう。

ここでリンゼイ氏が、自分の任期切れにともない、ジャディーン氏の親友のウエットモア氏が後任にあたることを発表する。

### バーラムへのデントの提案

ウエットモアの挨拶の間、デントはバーラムの耳元で「ここの状況がわかっただろう」と囁

き、その真意を探ろうとするバーラムをバルコニーに連れ出し、状況を彼の立場から説明する。

デントは、スレイドとキングの双方に対し異論を持つ第三の立場を代表している。デントが恐れているのは、ジャディーンがイギリスに帰ったあと、キングが中国政府の方針に同調し、「委員会」で多数派工作に乗り出すことである。しかし、より彼にとって重要なのは、ジャディーン派とキング氏がある一点で歩調を合わせている点だ、という。つまり、ジャディーンは、中国政府の介入を擁護するキングと同様に、「自由貿易」を掲げながら、女王の軍隊の軍事介入を求めようとしているのだ、と言う。これは「自由貿易」の原則と矛盾し、それを愚弄するものであると言う。政府が「見えざる手」（市場のメカニズム＝筆者）を人為的に左右し、貿易の流れを自らの意思に従わせようとするとき、自由な人々は自分たちの自由が危機に曝されていると感じるのだ、という。何故なら、それは神が我々に与え賜うた自由な意思を国家が奪おうとしているときだからだ、という。読者は、このデントの言葉に耳慣れた響きを感じるであろう。これは、時代を超えて、現在のアメリカで、民間の経済活動に対する国家のあらゆる規制に強く反発する共和党の右派やネオ・リベラリストが口にしようとするセリフだからだ。

だがこのような抽象的な議論を嫌うバーラムは、では具体的にどうするつもりか、とデントに聞く。デントは、神を信じ、自然の法則にまかせることだ、という。つまり経済への国家の介入や規制を排する「自由放任」論である。人間の富への激しい欲望が遅からず再び顔を出し、上から支配しようとするものの野望を打ち砕くであろう、という。だが、バーラムは、もっと簡単な説明を求める。するとデントは、中国での阿片への需要は、北京の命令によって抑えられたか？と聞く。いや、そんなことはない、とバーラムは答える。デントは、食物がなくなったからといって飢えがなくなるわけではない。もっと食べ物が欲しくなるだけだ。阿片だって同じだ。その証拠に阿片の値段が一年前から5倍に跳ね上がっているという。デントは、それは、官僚や兵隊や旗持ちの取る賄賂が今や何倍にもなっているということだ。北京の役人がその理に気づくのには時間がかからない。皇帝の禁止が撤回されないと、下の者たちが満州王朝に反旗を翻す動きを防げなくなる。所詮満州王朝は漢民族じゃないのだから、という。つまり、上から阿片を強圧的に禁止すると下から反乱が起きるのであろう、というのだ。だからイギリスの軍事介入は必要ないというのだ。(RS, pp.226-227)

阿片を禁止するとやがて役人や民衆の間から反乱が起き、王朝を倒すであろう、というデントの理論は、中国の官僚や役人が皆強欲で利己的で腐敗しきっており、そして兵隊や一般民衆が皆、愚かで、理性のかげりもない、という認識があってこそ成立する理屈であろう。つまりデントの論理は非文明国＝中国という図式を下敷きにしていると言えよう。

だが、バーラムには、そのように抽象的で高邁な議論への関心はない。彼にとっての問題は、香港島と九竜半島間の海峡に阿片を山積みにした船を停泊させたままで、未だ、全く売却できていないということが問題なのである。だから、「自分には時間がないのだ」という。すると、

デントもまた、自分も同じ状況にいる。そして、もし、キング派が勝利すれば、我々は積荷を全て失う。他方、ジャディーン派が勝利したとしても、イギリスから政府の軍艦が到着するまでに1,2年はかかる。自分への債権者はイギリスから軍隊が到着するまで待つてはくれない、という。そこでデントの提案は、二人して、早急に積荷を売却するために協力する必要がある、「商業会議所」が「影の内閣」のように我々個人の自由の邪魔をしないようにすることが肝要だという。世界の両側にある政府が我々をそれぞれの意思に従わせようとしている。だから我々がそれに抵抗する準備をする必要がある。パーラム、君を頼りにしていいか、と聞く。(RS, p.227)

つまり、デントの高邁な言葉に飾られた「自由」とは、禁制品の阿片を、体裁をかなぐり捨て、手っ取り早く自ら中国商人に売り、儲けるという利己的・反社会的「自由」なのである。ジャディーンがより長期的な視野に立ち、国家の庇護を取り付け、安定的な利益実現を目指す落ち着いた大人の立場であるとすれば、デントの立場は、欲望の即時的充足の為には手段を選ばない思慮に欠けた子供っぽい振る舞いなのである。

パーラムは、キング氏とジャディーン氏のいずれとも連携する気はないのだが、他方、デント氏が多数派を形成できるのかには疑問があった。デントは、今広東に向かっているベンジャミン・バーンハムが到着し、君と力を合わせれば、「委員会」の多数を得ることができるのだが、という。バーンハムは、第一部で地主のニールを騙し、牢獄においやったイギリス商人であるが、カルカッタの商人たちの代表として「委員会」のメンバーなのだ。しかし、パーラムは、ここで自分の立場を明確にするのはまだ早いと判断し、もう少し考えさせてくれ、といい、そこで話を打ち切る。(RS, pp.227-228)

### インスとの結託？

パーティ会場に戻ったパーラムが出会ったのは、悪評高いインス氏であった。これまたスコットランド人で家柄はいいのだが、自分勝手な人間で、喧嘩早く、ボンベイではまともな商人が相手にしない為、悪党から阿片を仕入れ、商売をやってきたという男だ。

だがデントは、パーラムが驚いたことには、インスのような人間こそ、我々の問題を解決し、専制君主の意図を挫く、自由貿易の大義の戦士だという。インスは中国政府の禁令をもともしもせず現に今、阿片を自分で陸揚げしている唯一の人間なのだ。もちろん、現地の税関の役人や北京からきた役人を買収することなしに、そのようなことはできない。これまでのところインスはうまくやっている。人間の自由の基礎としての金への欲望が、いつも専制君主の気まぐれに勝利を収めるということの証明だ、という。インスはデントのためにすでに数十箱売ってくれた、君のことも頼んでやろうか、と耳元で囁く。しかしパーラムは、自分がインスのような人間と取引をしたことがボンベイに伝われば自分がどういわれるかを考えゾツとしたので即座に断る。(RS, p.229)

このようにして、広東の「商業会議所」のなかでは、阿片貿易を巡って立場が三様に分かれ、激しい闘いが繰り広げられているのであった。

ジャディーンは、中国政府の阿片持ち込み禁止政策に対し、阿片貿易を守る為にイギリス政府の軍事介入を求め、スレイドもそれを支持する立場からイギリス政府のまずいやり方を批判し、現地の貿易商の意見を尊重せよと主張している。

それに対し、デント氏は、イギリス政府の力に頼れば時間が掛かる為、それまでイギリス商人がやってこなかった、自ら阿片を中国に持ち込み、売りさばくという手取り早い危険な賭けにで、そのために、インスという評判の悪い男に汚い仕事をさせているのだ。

他方、キング氏は、「自由」という美名に隠された、利己的で反社会的・非道徳的な欲望に基づく貿易を批判し、キリスト教徒としての良心から、阿片貿易を禁止しようとする清の皇帝の立場を支持しているのだ。

#### バーラムへの誘い

インスの誘いは、間もなく現実的な形を取る。パーティからほどなくして、ヴィコがホー・ラオ・キンという男がバーラムに会いたいと言っていると告げる。その名前にバーラムは覚えがなかったのだが、その男の別名であるアロウという名前を聞いて思い出す。アロウは、かつてバーラムとチー・メイの逢瀬を手伝ってくれた使い走りの少年で、後にわかるのであるが、チー・メイの甥だったのだ。アロウは、今は阿片を売りさばく組織で働いており、追い詰められたバーラムに助け船を出そうというのだ。さらにアロウは、今の知事が去った後、より厳しい政策を講じる高官が北京からやってくるといい、彼が着く前に積荷を100箱売ってくれというのだ。その新しい役人とは林則徐という男だという。(RS, p.244-245)

そしてヴィコは、今、船から阿片を広東に運んでいるのはインスだけで、阿片を他の積荷の間に隠し、密かに持ちこんでいるのだという。そしてバーラムがインスに直接OKを出しさえすれば手筈は全て整っていて、大きな利益になるという。

しかし、ここでアロウは間違いを犯す。アロウはバーラムに、チー・メイの船を自分が買い取ったといい、それに乗ってシング・ソング・ガール（水上の売春宿の女）を連れて楽しめばよい、チー・メイとしたように、と言ったのだ。それを聞いたバーラムは激怒する。自分とチー・メイの関係を侮辱されたと感じたのだ。そしてアロウを追い払う。(RS, p.247)

#### 公行パン・ヒー・クア (Punhyqua) 主催のパーティ

デントは、アロウを使ってバーラムを説得する手が失敗すると、次には、公行の大商人を使う。ある日、バーラムに公行の一人から一通の招待状が届く。かつて公行たちは、しばしば大きな晩餐会を催し、そうした機会に、親密に二人だけで情報交換したものであったが、最近の

情勢の変化のなかで、そのような晩餐会は稀なことになっていたのだ。そして、その招待状がパン・ヒー・クアからのものであることを知ったとき、喜びはさらに大きいものとなった。パン・ヒー・クアは、パール河のホーナム島に屋敷と大庭園を構える広東の公行の一人である。彼は、福建省出の商人一族の末裔で、その一族の一人が18世紀中盤に広東の公行を創ったのである。公行のなかで最も裕福な一族の一つで、高級官僚の地位をもち、色と食を好むという。(RS, p.262)

そしてパーラムの胸には、かつて若かりし頃、グジャラートの村の出身の貧しかった自分がパン・ヒー・クアの華やかな晩餐会に招かれたことに感激した思い出が蘇るのであった。(RS, p.265)

ホーナム島のパン・ヒー・クアの屋敷での晩餐会は、周りを沢山の提灯の光に照らされた蓮の池を見下ろすお堂で行われた。実は、パン・ヒー・クアの先祖は、ボンベイのインド人商人と古くから深い絆を持っていて、かつて北京のお役人からひどい目にあったとき、パーシの商人は寛大な条件で金を貸したことがあった。それがなければ今のパン・ヒー・クアの繁栄はなかったかも知れないのだ。彼はそのことを決して忘れず、いつもパーシ商人を特別扱いしてきたのだ。

食事が一段落ついたとき、パーラムはパン・ヒー・クワの合図で、橋を渡り、池のなかの小島に渡り、天幕の下で二人きりで話をする。

パン・ヒー・クアによれば、皇帝は林則徐を北京に呼び出したという。林則徐は福建省の出身で、彼も良く知っている人物である。貧しいが名門の出で、若くして科挙に優秀な成績で合格し、またたくまに官僚社会の階段を上り詰め、非常な才能と清廉潔白な人柄で名声を得た。宮廷の意に反することでも意見を披露することを恐れない人物でもあった。災害や不満を抱いた農民の反乱、堤の決壊等やっかいな事態が起きると政府は林則徐に助けを求めた。そして40代にして江蘇省(Kiangsi)省の知事という人が羨む地位についたという。(RS, p.271)

林則徐がイギリス人の阿片商人と初めて出会ったのはその時のことで、6年前である。イギリスのアムバースト卿号は、外国との貿易を広東だけに限った中国政府の規制をくぐり、取引に応じてくれる中国人を求めて北方沿岸を航海していたのだ。パーラムもそうした投機的な企てに参加することを許されたインド商人の一人であり、彼も投資していたのである。しかし天候不順で、中国の港に助けを求め、何をしていたのかと問われ、カルカッタから日本に向かう途中でコースから外れてしまったのだ、と答える。しかし、彼らが中国語で書かれたパンフレットを持っていたため、それが嘘であることがばれてしまったのだ。こうした経験から林則徐は、イギリス人が嘘つきであることを知る。そして別の省の知事に任命されると、そこでの阿片取り締まりに大きな成果を上げる。そして阿片取引の実態についての報告書を求められ、それまでで最も包括的なものを皇帝に提出する。彼はスパイを通じ、取引の実態を詳細に知っていた

のだ。そのような男が広東に来ることになればやっかいなことになる、とパン・ヒー・クアはいう。そしてまだ決まったわけではないが、きわめてその可能性が高い。天子は、中国から阿片を一掃しないことにはご先祖さまに顔向けができないと、考えているからだ、という。パーラムは、これまでも、厳しい取り締まりがあったが、それでもまだ続いている、というが、パン・ヒー・クアは、林則徐は他の連中とは違う、だから、持っている積荷があれば、今のうちに売った方がいい、と助言する。(RS, p.272) デントは、この最後の言葉を言わせる為に、パン・ヒー・クアを利用したのだ。

この晩餐会の後、パーラムは、迎の船が来ないので、待ち受けていたアロウに誘われ、チー・メイがかつて持っていた船で帰路につく。そして船のなかでアロウから阿片を振る舞われ、女性と甘美な性交に陶酔する。事が終わった後、気づくとそこには誰もいない。そして不思議なことに河から誰かが船に上がってきたように河の水滴が残っていたのである。この河で殺されたチー・メイの亡霊が彼に会いに来たかのようだ。そしてそのあと、アロウは再び、パーラムの積荷を密かに買い取ろうという提案をし、彼は承諾する。(RS, pp.280-282)

こうしてパーラムは、林則徐がやってくる前に、阿片を広東へ運び込み売却する仕事をインスに依頼するという危険な賭けにでる。その仕組みはこうだ。アナヒータ号から阿片を積み下ろし、小舟でパール河を遡り、ファンキ・タウンに着くと、人目に付くマイダンを通さず、直接、ファンキ・タウンの端を流れる下水路に船を入れ、そこにあるクリーク商館の倉庫に積荷を下ろすのである。河から下水路に入る所には税関があるが、役人には金を渡せばよい、という仕組みが出来上がっているのだ。そしてクリーク商館はインスやジャディーン等の自由貿易主義者たちの巣窟になっている。(RS, p.295)

### 取引への手入れ

だが、物語はここで急展開する。パーラムは、当日取引が滞りなく行われるかどうか確かめにクリーク商会に行くと、中国の軍隊が水路から商会を急襲し、阿片を押収し、荷物を船から倉庫に運び入れていたインド人船員たちを逮捕したのだ。そしてインスも兵隊に取り囲まれている。慌ててパーラムがそこから立ち去ると、驚いたことには公行のパン・ヒー・クワが兵士に両脇を固められ連れ去られてゆくのである。しかも首には重い木の板(カンブ)が枷のように嵌められている。それは一般に囚人に使われるものである。彼の背後には家族のものたちが泣きながら見送っている。パーラムは、ボンベイのアポロ通りの屋敷から自分が家族の目の前で連れ去られてゆく姿を想像し、心臓が止まる思いであった。(RS, pp.310-301) そしてその後、パン・ヒー・クワはパール河の岸の刑場に連れて行かれ、晒し者にされる。彼はインスと共に謀し、阿片を売りさばこうとしたところを逮捕されたのである。インスが町を去らないと斬首されるかも知れないという。(RS, pp.315-317)



ここで注目すべきことは、ゴーシュが、他者への共感能力がバーラムの心に働く様を描いていることである。バーラムは、中国人のビジネスマンの友人の惨めな姿に自らを重ね、自分が相手の立場にあればどう感じるであろうかと想像力を働かせ、相手の惨めな気持ちを押し量っているのである。それが可能であったのは、中国人の友人との国籍や文化の違いを乗り越え、同じ仕事仲間としての連帯意識があるからであろう。そしてこのバーラムの人間的能力は、不幸にも彼をこれから悲劇に向けて追い込んで行くのである。

非常に興味深いことは、この共感能力こそは『道徳感情論』でアダム・スミスが人間の利己心に対置し、人間の感情の根底にあるものとして強調した人間心理の特質である。アダム・スミスは、この共感能力が基になり、その展開のなかから公正さや正義といった道徳的感情が生まれて行く過程を分析しているのである<sup>13)</sup>。

### 中国商人の動き

手入れの後、中国側と阿片商人の間のやり取りの焦点はインスをどうするのか、という問題に移る。公行たちは、声明を出しインスの立ち退きを要求するとともに、共謀者の名を明らかにすることを求める。しかし、インス自身は、共謀者の存在を完全に否定したばかりでなく、密輸事件そのものが中国政府によるでっちあげだとして完全無罪を主張したのである。

これに公行たちは困り果てる。何故ならこれまでの慣行により、公行は、外国商人の保証人になっており、政府が定めた取引のルールを蹂躪するインスのような外国商人を町から追い出す義務を負っているからだ。そして、もしそれができないのなら、公行にその責任が降りかかってくるのだという。そしてその罰たるや恐ろしいものであるという。(RS, p.316)

### 公行と「委員会」の秘密会談での議論

そこで公行は、秘密の「委員会」の場を通じインスを撤退させるよう働きかける。「委員会」のなかではキングがインスを撤退させるべきだと主張するが、スレイドは、「委員会」に属していないインスに指示を出すことはできない、と手続き論を展開し、膠着状態が続く。

バーラムは、ふと怯えた表情をして窓の外を見つめるインスに目をやり、思わず同情する。この男が黙っていなければ、自分も広東から永久追放されるのである。その瞬間バーラムは、広東のファンキ・タウンが自分の人生において持っていた意味を痛感する。ファンキ・タウンは、彼が人生を謳歌し、生きる術をまなんだ所だった。ファンキ・タウンという逃げ場がなければ、自分はしががない人間、失敗者、貧しい親戚としての肩身の狭い境遇に甘んじるしかなかったのだ。広東こそが彼に富、友人、社会的地位、そして息子と愛と肉欲を教えてくれたのだ。そう考え、何故インスが罪を認めないのかがわかった。彼には永遠に広東から追放されることが耐えられなかったのだ。(RS, p.24)

このようにしてバーラムは、パン・ヒー・クアの立場に身を置いて同情したのと同様に、自分をインスの立場において、その気持ちを推察するのである。

他方、インスは、ここにいる全員が罪を犯しており、自分はただ正直なだけである。その自分が立ち去らないことで天罰が下るなら降ればいい。それが早けりゃそれだけ結構な事だ、と言う。(RS, pp.325-327) バーラムとは対照的にインスは、自分の行為によってパートナーである公行に降りかかった命の危険を顧みる人間的共感能力を持たず、ただ自分の立場しか考えることができないのだ。

### 阿片貿易による深刻な事態

公行との会談の後、ロビンはキング氏と親しくなり、阿片が中国に及ぼしている深刻な事態について聞く。キング氏は、外国商人が理解していないのは、何千、あるいは数百万人の人々一坊主、将軍、主婦、兵士、官僚、学生一が阿片の奴隷に成ってしまった為に、阿片を輸入し続けることは不可能となってしまったことだ。より一層危険なことは、それに伴う腐敗だ。何百人という役人が阿片貿易継続の為に賄賂を受け取っているのだ。これは中国にとって死活問題だ。というのは、過去30年の間に阿片の輸入は10倍に増えており、もし中国が阿片の輸入を止めないと、彼らの国は内部から蝕まれてしまうだろう。それこそ外国人が狙っていることかもしれない。口では、自由や宗教をもたらしとっているにもかかわらず・・・今回のことでは蜂起が起きるかもしれない、と警告する。そしてそれは現実となる。(RS, 330)

### マイダーンでのアロウの処刑騒ぎと民衆の反乱

次の日の朝、1938年12月12日にマイダーンに兵隊が太鼓、ゴングや破裂する花火の音を伴いながらやって来る。騒ぎを聞いて何事だとマイダーンから人々が出て来る。すると罪人を処刑するための木造りの台が地面に建てられ、城壁の中から椅子に乘せられ手を後ろ手に縛られ、頭を左右に振っている男が運ばれて来る。

椅子に縛られた男の動きは激しさを増し、唯一自由の利く頭を必至に振り続けるのだ。やがて役人が男に阿片のパイプを渡す。するとそこへアメリカ人が近づき、処刑をアメリカの国旗の下で行うことに抗議し、集まった群衆に訴える。

他方、阿片を吸った男は静かになり、自分の運命を忘却し、夢見心地の様子である。しかし、処刑台の前に連れて行かれたとき、それを見て叫び声をあげ、その膝が震える。それを見た群衆は、ニールも含め、一体となり、役人たちに投石を始める。たまらなくなり、兵隊や役人は城壁のなかに囚人を連れて逃げ込む。勝利感に浸る間もなく、今度は城壁のなかから数百人の広東の住人が彼らに向かって押しかけてくるのが見え、石が降ってくる。ニールは必至の思いでアチャ・ホンに逃げ込むが石が頭にあたり、気が付くと部屋のなかに寝かされ、ヴィコが心

配そくに顔を覗きこんでいたのであった。ヴィコによれば、ニールが気をうしなっている間に、群衆は破城鎚を使って商館の門を打ち破ろうとしたのだ。白人のなかには銃を持ち出してきたものもいたが、幸い群衆に発砲する前に中国の警官がやってきて群衆を広場から追い出し、瞬く間に事を鎮めたのだ。そして事が静まったころ、イギリス代表のエリオットがマカオからやってくる。彼は問題が起きているという情報を得て、インド兵や船員とともにやってきたのだ。

エリオットは騒ぎのあと集会を招集し、イギリスの船はもはや広東に阿片を持ちこんではいけないという。ヴィコによれば、バーラムは、その後、デント氏やスレイド氏とクラブに夕食にいったという。(RS, p.331-336)

クラブに着くとデントは中国人の民衆が怒ってファンキ・タウンを襲ったことには触れず、エリオット氏が、阿片を持ち込んだ自分を批判したことに怒りを露わにする。そしてデントとスレイドは、旺盛な食欲を發揮し、美食に興じながら、もともと阿片を広東に持ち込んだのはアメリカ人であること、また、イギリスと中国の間には外交上の協定がなく、従って領事としての権限もない。彼は持っていない権限を行使し、阿片の持ち込み禁止令を出しているのだ、俺たちが給料を支払っている連中が、中国皇帝の誤った政策のお先棒を担ぐとは、と息巻く。(RS, p.337)

しかし、バーラムはこの二人とは対照的に、食欲を失い、落ち込んでいる。昼間、騒動が起きたときバーラムは、彼の窓の下で処刑台が組み立てられていることを現実とは思えなかった。そして男が処刑の為にマイダーンに引き出されたとき、その非現実感ほさらに高まった。そして処刑されることに必至に抗う男が、目を大きく見開き、窓辺の彼の顔を見つめているような気がしたのだ。それに動揺し、バーラムは窓から離れたが、再び窓辺に寄ったときには騒ぎは治まっていたのだ。

バーラムは、喋っているスレイドを遮り、「あの男はどうなったのか？」と聞く。すると、あの後処刑場に連れて行かれ刑を執行された筈だ」という答えが返ってきた。再びバーラムが窓を見ると、白鳥湖では婚礼の花火が上がっていた。それを見て、遠い昔、チー・メイと二人で船の上に横たわった夜のことを思い出す。そのときチー・メイに言われ、アロウにも心付けに阿片を渡したのだ。それを思い出すと、バーラムは、夜の花火を見続けることに耐えられなくなり、早々と一人ディナーの場を辞することにする。(RS, p.339)

### アロウの亡霊を見るバーラム

バーラムがデンマーク商館からでるとマイダーンに人影はなく、濃い霧が河から流れてきていた。遠くの白鳥湖では花火が上がり、炸裂すると様々な光が霧に映えるのである。そのような花火の炸裂のなか、バーラムは10歩ほど先にガウンを着た男を見た。顔は見えなかったが、歩き方から誰かはハッキリと分かった。アロウか？と彼は聞いた。答えはなかった。再び花火

が上がり、再びその男の姿が見えた。バーラムは、「どうして返事をしない？」と足取りを速めた。すると深い霧のなかバーラムを探すヴィコの声が聞こえた。バーラムはアロウが前を歩いているのを見たというが、ヴィコはそんなはずはないという。アロウは、阿片の運び込みの際に逮捕され、今日の朝マイダーンで処刑される筈であったが、騒乱がおき、午後、刑場で絞首刑に処せられた、というのだ。(RS, pp.340-341)

こうしてバーラムは、アロウへの罪悪感に苛まれ始め、死んだ男の亡霊さえ見るようになる。だが、デントとスレイドは、広場での処刑騒ぎや、その後、その男が別の場所で処刑されたことを知っても、何も感じない。ここにゴーシュが込めた意図は明らかであろう。

### 暴動の意味についてのキング氏の見解

ゴーシュは、ロビンの書簡を通じ、中国民衆がマイダーンになだれ込み暴動を起こしたことの意味と、それに対する阿片商人たちの受け止め方をポーレットに知らせる。

ロビンは、ゼイディンとともに、イギリス代表のエリオットが招集した外国人集会に行く途中でアメリカ商館のキング氏を訪れ、キング氏の暴動についての見方を知る。キング氏は、この騒動は、中国民衆自身が阿片を求めている、というスレイドやデントの見方の誤りを証明したという。民衆は、外国人が罰せられることもなく阿片を中国に持ち込んでいることに怒り、政府の方針を支持しているというのだ。つまり阿片の密輸は、中国の良き人々の外国人への支持を失い、悪い人々の欲望を甘やかしてきたのだ、という。マイダーンでの処刑を官僚が決意したのは、外国人は子供と同じで、理性的手段で話をしても通じないと思っただけのことである。そのやり方に問題はあがあるが、我々は、自分たちの行為の結果を今や思い知ったのだ、と言う。(RS, p.346)

しかし、集会の場に着いてゼイディンが困惑したのは、会場に集まった人々には、キング氏を除いてまったく後悔の気配が見られないばかりか、一層好戦的であったことである。

集会でエリオットは、マイダーンでの絞首刑は控えるべきだが、他方、イギリス貿易業者も、阿片をイギリスの船で公然と持ち込むようなことはやめなくてはならない、と言ったが、より重要な問題、阿片をインドから中国に持ち込むこと、については言及しなかった。阿片のインドでの生産と販売はイギリス政府のお墨付きを得ているのであるから、そもそもそのようなことはできるはずもないのだ。(RS, pp.346-348)

そしてロビンは、この事件の後、それまで親しかったファンキ・タウンで仕事をする中国人の態度が豹変し反感に転じているのを肌身で感じ、落ち込み、外出できなくなる。

他方、キングは、阿片貿易を止め、積荷を差し出すことを呼びかけた署名を集めようとし、外国人の怒りと嘲笑を買い、やはり落ち込む。しかし、インスは事ここに至り、ついに広東から出て行く。(RS, pp.349-350)

ある朝、朝食の時に秘書のニールは、スレイドが『チャイニーズ・レポジトリ』誌上に長い

論文を発表し、中国側に宥和的態度を示すエリオットを批判している、と知らせる。その中身を聞いてバーラムが驚いたのは、この調子では、エリオット氏は、次にデント氏、ジャディーン氏、そしてモディ氏（バーラムのこと）を広東から追放すると言い出すであろう、という部分である。それを聞いてバーラムは動揺し、手の震えを抑えることがしばらくできなかった。バーラムは、ニールを自分の部屋に返し、窓際に立ちマイダーンを眺めるが、するとあの日、自分の阿片を運んだ為に処刑されてしまったアロウのことを思い出すのである。(RS, pp.357-359)

数日後、キングがバーラムの事務所を訪れる。キングは、このままではイギリスは中国を攻撃するといひ、そうならないように、今後阿片を持ち込まないという宣誓書を再び「委員会」で提案したいので、賛同してほしいというものである。だがバーラムは、自分たちが辞めても、他の人々が参入するだろう、何故なら中国人自身が阿片を望んでいるからだ、という。キングは、阿片が入ってくるために人々はそれに心を奪われるのだ、という。では沖の積荷はどうするのか、と聞くと放棄するのだという。だがバーラムは、阿片を合法化すべきだという陳述書も皇帝に上奏されていると指摘する。キング氏は、そういう動きがあることを認めながらも、皇帝はそれとは逆の、阿片を禁止する方針を決定したのだ、という。12月12日の知事による手入れはそのことをはっきりと示している。知事は外国への敬意の欠如を非難した「商業会議所」の手紙に答えた書簡のなかで、アロウの処刑は墮落した外国人が広東に阿片を持ち込んだことの結果であり、外国人の心に反省をもたらすことを目的としたものである、何故ならば文明に浴していない外国人といえども人間の心を持っているからだ、と述べていたのだ。これを読んで、バーラムは、アロウが自分の窓があるあたりに視線をやったことを思い出し、ゾットしてお守りに手をやる。

そして噂によれば、アロウは、処刑されると聞かされたとき、マイダーンで処刑されたいと言ったのだ、とキング氏はいう。バーラムは、もうそれ以上、聞いていられず、そそくさと別れを告げる。(RS, pp.361-362)

こうしてバーラムは、アロウへの罪悪感と、運んできた阿片を売らないと自分は破滅するしかない、というジレンマに陥るのである。

次の日の朝、バーラムは、秘書のニールから、林則徐が12月31日に皇帝直々の任命を受け広東に向かっているというニュースを聞く。その地位はインドの総督のようなもので、知事、将軍、その他の役人の全てを集めたよりも強く、その目的は、麻薬根絶にあるという。(RS, pp.363-364)

他方、バーラムは、ボンベイとカルカッタからやってきた阿片を積んだ船が香港に停泊している船団に合流したという知らせを受ける。そして船とともにやってきた手紙にバーラムはショックを受ける。去年は、インドでケシの花がかつてない豊作のため、市場に阿片があふれ、値が一気に下落したのだ。もう数か月待っていたら、彼が買った半値で手に入れることもでき

たのだ。そして、もはや彼の積荷をインドに持ち帰ることもできない。(RS, pp.365-365)

その日一日、バーラムはマイダーンに目をやろうとしなかったが、深夜、寝ようとするともマイダーンの中央で宗教的儀式が始まる。バーラムは、チー・メイの船で類似の儀式を見たことを思い出す。チー・メイは、成仏できない霊や欲深い霊を恐れ、道教の僧侶による悪霊払いのお清めの儀式をよく行っていた。それと同じ儀式がマイダーンで進行していたのだ。それに気づきバーラムは、アロウの魂が成仏できずマイダーンをさまよっているのかも知れないとさらに動揺し、ヴィコに宥められる。(RS, p.373)

一月末、ジャディーがイギリスへ帰る時期が迫る。イギリス商人の間には彼の帰国を敗北として認めるのではなく、その拒絶として盛大に祝おうという雰囲気になる。バーラムは晩餐会ではデントとカルカッタからやって来たバーンハムの間に座ることになる。

バーンハムは、カルカッタで値の下がった阿片をかつてない量買い込み、シンガポールでもさらに買い込んだという。では最近の情勢は気にならないのか、というバーラムの質問にも、まったく、と答え、中国官僚は阿片を求める人心にはかなわない、という。そして、ジャディーがロンドンにいることは我々に非常に有利な要素だという。(RS, p.377)

### 林則徐、広東に向けて旅立つ

2月過ぎに、皇帝の全権を帯びた林則徐が広東に向かっているという知らせが、「商業会議所」のクラブを食事に訪れた通訳の若きフィアソン氏を通じて入ってくる。

通訳から聞かされた林則徐の旅の仕方は、スレイド、デント、バーンハムの三人を驚かせる。彼は、旅の旅費を自分の懐から出費し、国庫には負担をかけていないというのだ。これを聞き、皆は、信じられないという、驚きの声を上げる。北京の官僚が、公の財産によって私腹をこやすことを拒否するなどということは、あり得ないことだったからだ。

別の日のフィアソンからの情報では、林則徐は途中で外国事情に幾ばくかの知識を持っている学者を集めて会議を開いているので到着が少し遅れている、というのである。外国の事情について知っている中国人がいるというのも信じられない話であった。というのも、これまでそういう人々がヨーロッパ人についてとんでもない知識を披露し、物笑いの種になっていたからだ。(RS, pp.390-391)

こうした林則徐情報への彼らの反応から、所謂中国通のヨーロッパ人がもっていた中国人への侮辱感に満ちた像が浮かび上がって来る。科挙試験に合格した中国のエリート層の人々が、私利・私欲のために賄賂を受け取り、不正を見過ごし、中国を世界の頂点に置く中華思想に邪魔され、産業革命を果たしたイギリスを始めとする欧米諸国について正しい知識を知ろうともしない、と軽蔑していたのである。

### 林則徐の歴史的位

そういう中国官吏のステレオタイプを打ち破る林則徐を我々はどう中国の歴史的な脈のなかに位置付ければよいのであろうか？陳舜信氏によれば、清の全盛期は17世紀中盤から18世紀末の130年間であるが、全盛期の最後を飾る乾隆帝の死後、寵臣の一人が逮捕され処刑される。その罪状は、二十年間に渡り歳入の半分近くを懐にいられたからだという。だがその間、中国の人口は倍増し、耕地面積はそれにもなって増えなかったために、国民の生活苦が目立つようになる。そのような時代の傾きを敏感に感じ取り、憂う知識人（官吏）兼詩人がやがて現れる。その名を都落ちの詩人龔自珍といい、彼を中心に宣南詩社という同人が組織されていた。そしてその同人のなかには、儒教の「公羊学派」に属する人々が多かった。「公羊学派」は、文献の解釈や考証に明け暮れる当時の朱子学に疑問を感じ、歴史書の詳細な事実の羅列のなかに筆者の批判精神を読み解く所に特徴があった。当然、実際政治にも深い関心を寄せ、現行の政治体制の研究、批判を行い、行政組織、国防、経済、等を論じた人々であった。林則徐もまた、そのような人々の一人であった。皇帝独裁の政治のなかで政治にかかわる方法は、皇帝に政策を提言すること以外にはなかった。そして林則徐は、「公羊学派」のなかで唯一、そうした資格である科挙の合格者で高位の官吏であり、宣南者の同人たちの期待を一身に担う人物だったのだ。（陳, 1971, pp.8-25）

### 中国貿易の拠点としての広東

林則徐の広東への接近が広東の「会議所」の人々の間に不安を醸し出しているなかで、次期会長のウェットモア氏が、現会長のリンゼイ氏を慰労する小さなディナーを主催する。ここで話題となったのは、広東貿易への中国政府の規制が厳しくなるなかで、従来通り、広東を貿易の拠点にし続けるのかという点であった。

リンゼイ氏は、挨拶のなかで貿易の拠点を広東以外に求めるという方向性を示唆する。それに対し、スレイド氏は、最初はそれに同調するような調子で話し始めるが突然、声色を変え、大声で反論する。広東で二世紀も貿易をやってきて、今になって広東を放棄する事などできない。我々はここに残らねばならない。もしそれを中国政府が妨げるのなら、この国の権力をガタガタにしてやらねばならない。この国の支配者の無知と強情さがどういう結果を生み出すのか、目にものをみせてやる必要がある。じきにイギリス政府が、ここでも直接介入することになり、きつとなるだろう、と断言する。これを聞いて大喝采が起き、この難しい問題に満足すべき解決を与えたことを感謝するのであった。（RS, p.394）

スレイドはここで、犯罪人を、犠牲者であるかのように描き出し、犯罪人がさらに振う暴力を正当化しているのである。つまり、中国が根拠なく、専制的に、長年広東で取引をしてきた外国人を追い出そうとしているとし、自らをその犠牲者のごとくに描き出し、それに負けるの

ではなく、闘うべきだとし、今後の軍事力の行使を正当化しているのである。だが、中国政府が広東から追い出そうとしているのは阿片商人のみであり、中国が「無知」なのは、イギリスの軍事力、そして「強情」だとすれば、それは、阿片の根絶を目指す最近の断固とした姿勢であろう。スライドは、このように自分に都合のいい側面だけを取り上げ黒を白と言いくるめ、軍事介入を合理化している。これこそ大義のない帝国主義戦争を合理化するレトリックなのである。

### 林則徐の広東到着を熱狂的に歓迎する民衆

1939年3月になり、林則徐がいよいよ広東に到着する。それを受けて広東ではお祭り騒ぎとなる。人々は船を借り、パール河をやってくる林則徐を見るために大挙して繰り出し、この日は休日となる。太鼓や花火の音が遠くで聞こえ、ファンキ・タウンでは店が閉まる。イギリスやオランダ商館のベランダは見物人で賑わう。

ニールはコンプトン（『広東レジストリ』を出版する中国人の印刷業者＝筆者）の子供たちと一緒に船で河に乗り出すが、そこは船であふれている。その数の多さに驚きニールは、政府の高官が来るときにはいつもこうなのか、と聞く。コンプトンは笑って、いや、普通は、皆隠れてしまう。しかし、林則徐は他の官僚とは違うのだ、と答える。林則徐が到着する前から南方への旅の報告が続々と広東にも届いていて、人々の間にこのような熱狂を生み出したのだ。人々は、林則徐が、もはや死に絶えたと思われていた類の人物—賄賂を取らない公務員で同時に学者であり知識人でもあるような人物、伝説のなかでのみ記憶されている役人—ではないのか、と思い始めていたのだ。（RS, pp.394-396）

阿片根絶の命を受けてやってきた林則徐に対する広東の民衆の熱烈な歓迎は、阿片の蔓延に対する一般の中国人の態度を示すと同時に、彼らが期待する役人像—私利私欲のためではなく公僕として人々を守り、人々に奉仕する役人像をよく示している。アロウが処刑の為にマイダーンに引き出された日、広東の町からファンキ・タウンになだれ込み暴動を起こした民衆の阿片貿易への怒りと合わせ、中国人の間には多くのまともな価値観をもつ人々が存在していたのである。

そしてニールは、林則徐の姿を真近に見る。ニールは、林則徐をしかつめらしい威厳に満ちた人物かと思っていたが、実際は、生き生きとした好奇心に満ちた表情を浮かべ、目は鋭く、活発な知性をうかがわせる人物であった。また、コンプトンは、一行に同伴している彼の先生でもあるチャン・ルー・シーを指さす。彼は、英字紙『広東レジストリ』を読む為にコンプトンの印刷所によく顔をだすのだという。広東の城壁の門から町に入るとき、林則徐は飛び地のベランダから彼を見つめている外国人たちに目をやる。デントは、「あいつは平和的な意図を持ってやってきたわけではない」ことを忘れるなという。（RS, p.397）



広東の学院に居を構えた林則徐は、公行全員を呼び出し、広東の外国人貿易商宛の命令書を出し、それを受けて公行は、臨時「会議所総会」の開催を要請したという。そして会長のウエットモア氏は、昨晚、すぐさま通訳のフィアソン氏を呼び出し、「命令書」の翻訳作業に取り掛かったという。

林則徐が出した命令書は、以下のようなものであった。すなわち、外国商人は広東での貿易によって大きな利益を得てきた。外国商人は、皇帝によって与えられたそのような厚遇に感謝の気持ちを持っているのだろうか？もしそうであるならば、利益を上げるに際し、中国の法に従い、人々に害を与えてはならない。にもかかわらず、どうして阿片を持ち込み、人々の人生を破壊するのか？そのような行為は人々の心に怒りを呼び起こすものである。阿片の持ち込みに対する皇帝の怒りは大きく、この悪を根絶やしにするまで手を休めないであろう。広東の外国人は、中国人と同様に法に従わねばならない。(RS, p.403)

それを聞いて、会場には「信じられない」という囁きが広がる。それは首枷を嵌めたり、公開の場で絞首刑を執行するといった野蛮な中国の法に従えというのか、という驚きの声である。それを聞きながら、パーラムはアロウのことを思い出し、身を竦め、公行の集団に目をやるが、中国人の通訳の一人が自分を見つめている気がし、心臓が高鳴り、目を合わさないようにする。

フィアソン氏は、命令書の先を読みつづける。それによると、林則徐は、以下のような命令を下したという。第一に、リンティン島の近くに停泊している船に積んでいる阿片をすべて役人に引き渡すこと。そして誰がどれだけの量の阿片を引き渡したかを中国商人に検証させ、名簿のリストを政府の役人に提出すること。第二に、今後いっさい阿片を持ち込まず、それに違反した場合には、積荷を押収され、携わった人間は処刑されるであろうという誓約書を作成せよ、というものであった。(RS, p.404)

これを聞いて再び会場は大荒れとなるが、ウエットモア氏は、至急「委員会」を招集する。公行たちは、この声明への「委員会」の返事を求められており、返事なしには帰れない、と言っているのだという。

そこで緊急の「委員会」が開かれる。実は、声明には後半部分があるというのだ。その後半部分で林則徐は、外国人居住地に住み阿片を売っている人間について私はよく知っている。阿片を売っていない善き外国人についても同様に良く知っている、と言った上で、上記の命令に従うまで三日の猶予を与える、というものであった。

再び激しい議論が巻き起こるが、最後には、デントが、返事を延ばすことにより、林則徐の反応を見、どういう人間なのかを確かめてみよう、と提案し受入れられる。(RS, pp.405-407)つまり、林則徐の値踏みをしよう、というのだ。そしてウエットモア氏とキング氏が公行につき添って行き、返事延期の事情を説明しに行くことになる。二人は、次の日の朝方疲れ果てて戻ってくる。

ここでゴーシュは、二つのエピソードを挿入し、バーラムが阿片貿易に参入することになった事情や、キング氏が中国人の立場に立ち、阿片貿易を批判するようになった背景を説明する。

### バーラムが阿片貿易に参入した背景

拝火教の年の初めのお祭りの日の食事の後、招かれていたゼイディグとバーラムの間に会話が交わされる。バーラムは貧しかった少年時代を思い出し、贅沢な暮らしをしている今の自分を母親が見たらどう思うだろう、というが、ゼイディンは、もしこの富がすべて阿片によるものだと思ったらどう言うだろう、と皮肉で返す。バーラムは、母親なら「蓮の花は泥のなかに根を張らないと花開かない」と言っただろう、と言う。何が花開くのか、と言うゼイディンの質問にバーラムは、我々の新しい道、未来だ、という。「何を言っているのだ？」というゼイディンの質問に、バーラムは、「俺たちは自分が作り出した世界に住んでいるわけじゃない。・・・わずかばかりの機会を逃せば、最後には商売の世界から追い出されてしまうのだ」と、義父に起こったことをゼイディンに語る。

それは、アナヒータ号にまつわる話である。義父は、ボンベイで東インド会社やイギリス海軍の為に素晴らしい船を沢山造ってきた。彼の作った船は最新の技術を取り入れ、イギリスで造った船より安く上質のものだった。イギリスは、自由な競争に基づく自由貿易などと、自分に都合のいいときには主張するが、インド人がイギリスよりも良い船を造り始めると、東インド会社やイギリス海軍が、インドで造られた船を海外貿易に用いるとより金がかかるように法律を変えてしまったのだ。それを逸早く察知した義父は、インドの造船業の未来を察知し、それだけに、アナヒータ号を意地でも、最高で最も美しい船にしたのだ。そして義父は、造船業で起きていることが俺たちの別の分野にも波及すると予測し、別の道を考えないと俺たちはビジネスの世界から追い出されてしまうのだ、と言ったのだ。だから、俺たちは、ビジネスの場を法律が彼らの都合によって変えられ追い出されなくてすむようなところに求めざるを得ないのだ。それは、イギリスかもしれないし、中国かもしれない、ことによるとインド、・・・。バーラム、君は反乱を説いているみたいだな、とゼイディグはいう。バカなことを、俺は忠実な女王の臣民だ、とバーラムは呟く。(RS, p.422)

バーラムは、ビジネスのルールが宗主国の都合で変えられ、それに対し、異議申し立てができないという植民地下のビジネスマンの置かれた現実を理解し、生き残る術として阿片貿易に乗り出したのである。というのは、イギリスは阿片栽培地の全てを支配していたわけではなかったから、インドの商人にも参入の余地が存在したのだ。

### キング氏が中国に持つ愛着の由来

キング氏についてはどうであろうか？ゴーシュは、ロビンがフレンチ・アイランドの外人墓

地に眠るジェームズ・ペリット (James Perit) の墓をキング氏とともに訪れるエピソードを挿入し、キング氏が阿片を禁止する中国政府の側に立って中国を擁護する心情の由来と彼の中国人観を明らかにする。

ペリットは、キング氏の若き日の友であり、年若くしてこの地で世を去っていたのである。その友への思いがキング氏の中国への愛着の大きな原因であり、友人の墓が、キング氏を中国に繋ぎ止める錨のようなものになっていたのだ。そしてそのような中国への愛着故にキング氏は、中国人は西洋人とは別種の人種ではなく、どの国の人間もそうであるように、良いところも欠点もある人々であると見なし、そしてどの国であれ、彼らの弱い部類の人々の弱みにつけこみ搾取することは許されないと考えているのだ。そして阿片を売る連中の多くが敬虔なキリスト教徒を名乗るために、阿片の交易とキリスト教徒であることは矛盾しないと中国人が思ったとしても不思議ではない。異教徒の方がキリスト教徒より単純な道徳を理解しているという事態は、敬虔なキリスト教徒としてのキング氏にとって、耐えがたいことだったのだ。(RS, p.423)

#### 公行との会談の報告

他方、ゴーシュは、ウエットモア氏とキング氏が、「委員会」の結論を公行と中国高官に説明に行った際の出来事を次に描いている。

公行組合を訪れた二人は、古くからの友人でもある主だった中国商人たちに迎えられる。二人が、林則徐の設けた猶予期日をあえて無視するという「商業会議所」の結論を商人らに伝えると、彼らは、ショックと悲しみに打ちひしがれる。彼らは外国商人たちが状況の深刻さを理解してくれると思っていたのだ。命令に従わないと自分たちの誰かがきっと処刑されるであろうし、外国人がこれまで稼いできた膨大な富からすればほんの少額の金の為に、自分たちの命を危険に曝すとは想像もできなかったからだ。彼らの悲しみは見るのも哀れなものであった。(RS, pp.425-426)

次に彼らは清朝高官たちのもとに連れてゆかれる。高官たちも、返事にショックを受けるが、林則徐は、そのような手にのるような男ではないという。とはいえ彼らは丁重な扱いを受け、帰るときには絹とお茶のお土産さえ与えられたのだった。

キング氏は、全体の出来事を振り返りながら、中国側の対応は、極めて模範的であったという。彼らは当たり前の要求をきわめて丁重に行い、それに対し、外国人はより高い文明に属するといいいながら、それに泥をぬるような態度であった。もし、中国人が阿片をイギリスに持ち込もうとすれば、即座に絞首刑に会うであろうことを重々知りながらである、と言う。(RS, p.426)

高官に会った後、キング氏は、ウエットモア氏を説得し、中国側の要求を受け入れる書簡を二人で準備し、「委員会」に提案することに決める。これが大変なことを二人はよく理解して

いたが、バーラムを説得できれば勝算ありと、考える。キング氏は、バーラムを本当は善人であり、処刑された男のことを耳にするだけで、幽霊でも見たように怯える。これは彼が良心を持っている証拠だとキング氏はいう。(RS, p.427)

### 「委員会」での戦い

キング氏は、開催された「委員会」で、先の「委員会」の結論に公行たちが大きなショックを受け、彼らの瞳には死への恐怖が宿ったと報告する。ついでウエットモア氏は、天帝特命長官として林則徐が公行に発した命令書をそのまま読みあげる。公行たちに死への恐怖心を呼び起こしたのは、外国商人が、命令に従わないならば、公行が外国人商人をかばっていると見なし、公行のうちの一人、ないしは、二人が処刑されるであろう、それも打ち首である、という箇所であった。(RS, p.431)

### 阿片貿易弁護論によるアダム・スミスの曲解と自己欺瞞

それを聞いてバーンハムは、人命軽視だと怒りを露わにするが、キングは、あなたの人命尊重の精神は、阿片で命の危険に曝される人々には及ばないのですか？あなたの船の積荷によって何百、何千という人々を死に追いやっていることに気づかないのですか？と反論する。すると、バーンハムは、「そうは思わないね。何故なら、阿片の快楽を選ぶものに死の宣告を下しているのは私の手ではなく、目に見えぬ、全能の存在、自由の手、市場という手、自由の精神そのもの、ほかならぬ神の意志なのだ」という。それを聞いてキング氏は、自分をキリスト教徒だと呼ぶあなたは恥を知るべきだ。自由市場を神に対抗する神のように語るのは偶像崇拜の極みだ、と批判する。(RS, p.431)

阿片の販売により人の命を奪っていると個人的・道徳的責任を問われたバーンハムは、その責任を阿片が売り買いされる「市場」に転化する。阿片が売買される市場があり、阿片を吸いたいという人間が沢山いて、売れば儲かるから売るのであり、そのような仕組みそのものが「神の意思」であり、自分には責任はない、とアダム・スミスの権威の影に隠れるのだ。キング氏は、神ならば絶対に許さないであろう阿片の販売を、「市場」というもう一つの「神」をねつ造し、それに責任転嫁する行為を「偶像崇拜」だと批判する。当のアダム・スミス自身も市場において個人がある商品を売る行為を神の意思によるものとしたことはない。アダム・スミスは、利益を生むある商品があった場合、そこに投資が集中し、やがて需要との均衡が取れると利潤率が低下し、他のより高利潤の分野に資本が投下され、その結果、社会に必要な物資が万遍なく提供される市場の仕組みを「神の手」と言ったのである。しかも、アダム・スミスは、『道徳感情論』において、商品の売り手個人の道徳的責任を免罪したわけでは決してない。自分が売ることにより相手にはどういう結果が生じるであろうか、と相手の立場に立って考える共感能

力を道徳的感情の基本においているのである。こうしてバーンハムの阿片販売の合理化論は、アダム・スミスを自分に都合よく曲解したものに過ぎないのである。

二人の論争を聞いていたウエットモア氏は、今は神学論争のときではない。何故なら、人命が関わる最後通牒をどうするのが問題なのだという。するとスレイド氏は、公行商人は、恐怖心を装い、林則徐に協力し、自分たちは一文も損をしないかたちで積荷を手放させようとしているのだ、という。バーンハムは、しかし、どうすればいいのか？君はどうしたらいいというのか、とスレイドに問いかける。スレイドは、我々がどっしりと構え、脅かしに屈しないことだ、そうすれば、公行たちは、自分の頭で考え、賄賂を支払、それで事は終わりだ、という。もし我々がここで弱気にできれば、我々は全てを失う。今こそ我々は、我々の原則に固執しなければならぬ、と主張する。

### 阿片の密貿易自由論の行方

それに対しキング氏は、阿片の密輸にどのような原則があるというのか、私には理解できないという。それに対しバーンハムは、自由が原則であり、同時に権利ではないのか？専制君主や独裁者への恐怖なしに自分たちのことを決める自由を自由な人間が主張するとき、問題になっているのは自由の原則ではないのか？と返論する。キング氏は、それと同じ理由で、どんな殺人者だって、自分は自然権を行使しているだけだ、といえることになる。そんなことになれば、それは大量殺害の許可証である、と批判する。(RS, p.432)

このようなバーンハムの論理は、何を売ろうが、それがどういう結果をもたらそうが俺の自由である、と言っているのに等しい。それは、根本的には金を儲けたいという自らの欲望の絶対化に他ならず、そのことによる他者の不幸や悲惨さには目もくれないのである。

そこで、ウエットモア氏は、キング氏とともに起草した「委員会」の返事を提案する。その内容は、一定の留保条件を付けて、命令に従うというものである。その留保条件とは、船の積み荷は我々のものではなく、投資者のものであるので、積荷をインドにもどしたい、というものである。それに対し、バーラムは強く反対し、ボンベイでは阿片の値が暴落しており、積荷をボンベイに戻すことは破滅を意味すると主張。スレイドは、提案者は、中国人のことばかり懸念しているが、この積荷は貯金を叩いた多くの投資者のものである。彼らの破滅はどうなのだ、と主張する。(RS, p.433)

それに対しキングは、投資しているのは貧乏人ではない。少数の金持が、さらに裕福になろうとして何百万の人々を犠牲にしてもかまわないと思っているのだ、という。

するとスレイドは、やはりキング氏は、仲間の貿易商よりも中国人の味方なのだ。一体、どちらの肩を持つのか、中国人か、自分たちの仲間か？鋭敏な中国商人は、俺たちのなかの軟弱なものの同情心に訴え、脅威を誇張し、生き残ろうとしているのだという。

キング氏は、彼らの恐怖はリアルなものであると主張。今の損害は将来取り戻せるが、一度失われた命は二度ともどらない。まともな人間ならば、金持ちの懐と友人の首を天秤にかけることなどできない、という。(RS, p.435)

しかしデントは、公行たちは、我々のなかの男らしい勇気に欠けている軟弱なものたちの同情心に訴えようとしているのだ。それに騙されてはならないと主張。

キング氏は、男らしさとこの問題にどういう関係があるというのか、と切り返す。それに対し、バーンハムは、女のごとき軟弱さこそがアジア人の不幸の源である。だからこそ、阿片に影響されやすく、何事も官に頼りきりなのだ。もしこの国の官が、絵画や詩歌に心をとらわれ軟弱になっていなかったならば、中国は今のように惨めな状態にはなっていなかっただろう、という。(RS, p.437)

ここには当時の西洋の帝国主義者が西洋とアジアの関係をどう見ていたのかという点で極めて興味深い論点が示されている。第一に、キング氏が公行をビジネスの友人と考え、彼らの言う事を信用し、同じ人間としての立場から彼らを救おうとしているのに対し、スレイド、デント、バーンハムが一致して中国人を同じ人間ではなく、他者として、従って共感の対象ではなく、騙されてはいけない相手と見ていることである。そして第二に、バーンハムは、そのような対立的図式をさらに一般化し、西洋対アジア（中国）の関係を西洋社会の男と女の関係になぞらえ、西洋社会において強い男が軟弱な女性を支配しているように、中国は弱いが故に西洋にいいようにされているのだ、と「力こそ正義なり」という西洋の帝国主義をアジアの責任にすり替え、同時に西洋人のなかの中国人を友人と見なすキング氏を「軟弱」と非難する。第三に、中国の「軟弱さ」の原因を官尊民卑による民の官への依存にあるとして、官に対抗して政治的、経済的権利を拡張しつつあった興隆期のイギリスの中産階級（ブルジョワジー）の心意気を滲ませ、第四に、中国は、長年の中華思想に邪魔をされ、中国の支配層としての官自身が目覚ましい経済的・軍事的発展を遂げている西洋に無知であり、かつ知ろうともせず、伝統的な詩歌の世界に浸っていることが、彼らの惨めさの原因であるとし、自らの大義のなさを免罪しているのである。ゴーシュは、このようにして、短いやり取りのなかに、19世紀中盤のイギリスに代表されるヨーロッパ帝国主義者のアジア観を見事に要約しているのだ。

ここで、デントは対案を出す。最終的には阿片貿易を停止することは必要だと思うが、その為にはどういう方法が最良であるか検討する「委員会」を立ち上げたいというものであり、採決を提案する。するとキングは、事の重大性に鑑み、阿片の最大の供給地であるインドの唯一人の代表であるバーラム氏の意見を聞く必要があると言い、バーラムに言う。インド全体やその周辺地域の人々に対するあなた自身の義務、あなたの態度がこの委員会の中でもつ重みを考えていただきたい。あなたは、かつて私にあなたの宗教ほど、善と悪との永遠の闘いについて考えをめぐらせている宗教はないと仰った。今、あなたの前にある選択の意味、この瞬間ではな

く、死後の永遠の世界について考えていただきたい、あなたは光を選ぶのか、それとも闇を選ぶのか、とパーシとしての信仰心に訴える。

最後の言葉はバーラムの心に雷鳴のごとく響く。キングが他の国や大陸のことだけではなく、彼の信仰について語るのはフェアーではない、と思う。他の大陸や国のことはどうでもよい。自分はまず自分に最も近い人々のことを考えねばならない。そして自分が破滅したら自分のボンベイの子供たちやチャー・メイと自分との息子はどうなるのだ？たとえ、自分には天国への橋が閉ざされようと、彼らのことが大事だ、と考え、「私は、デント氏の提案に賛成する」と言ったのだ。つまり、バーラムはゾロアスター教の悪魔に良心を売ってでも、身近なものを守ろうとしたのである。(RS, p.438)

これは、バーラムにとっては、決定的な決断である。良心を失うことにより自分が死後どうなるだろうとも、身近なものたちの為に、阿片の積荷を守ろうとしたのである。ここにある意味では、バーラムの人間性を見ることができよう。だが、バーラムが大事にしようとする範囲は、身内の人間に限られている(他の大陸や国のことはどうでもよい)。そしてこの考え方こそ、インドを含む、独立後の多くの国の権力に近い人間が、利権を餌に賄賂によって家族・親類一族の蓄財を計る腐敗の構造の核心にあるものだ。

「委員会」がそのような返事を公行に送った日の夜中の11時に緊急の会議が招集される。中国商人たちが、そのような返事を林則徐に伝え、戻ってきて重要な話があるというのだ。バーラムとヴィコが帰ってきたのは朝の2時であった。

ヴィコによれば、林則徐は、明日の朝までに阿片が届けられないならば、朝10時に公行会館に行き、どういう措置を取るか明らかにする、と言ったのだ。中国商人たちはひどく動揺していたという。やがて、全部渡すかわりに1,000箱だけ渡してはどうだろうと提案するものが出て、この案に決まる。広東の町では大衆が怒っており、中国商人に危害が及べば暴動に発展するかも知れないと通訳が言ったことが彼らの心を変えさせたのだ。それを聞いて、外国商人たちは、いわば身代金として1,000箱を差し出すことに決めたのだ。(RS, p.449)

### 林則徐の側近とニールの会話

次の日の朝、ニールはマイダーンの空気がいつもとは違うことに気づいた。人々の態度に、あの処刑の日のような怒りを感じたのだ。(RS, p.450)

ニールが、チャイナ通りの中ごろまで行くとコンプトンの長男がやってきて「来い」という。印刷所の桜が咲き乱れる中庭にコンプトンがいて、彼の先生であり林則徐の側近の一人チャンルー・シーを紹介し、この朝、昨夜の緊急「会議」での結論を公行たちが林則徐に報告しに行った時のことについてニールに知らせる。

林則徐は、外国人がこれまでと同じように自分を買うことができるかどうか値踏みをしてい

ることを知り、また中国商人は彼らなりに努力したこと、また外国商人のなかにも阿片取引に反対するものもいることも承知した上で、最悪の連中に照準を当てることにしたのだ。そして、ジャディーンが去った今、最悪の人物はデントであるとし、デントを尋問の為に逮捕し、さらに大半の阿片を提供しているインドの代表、ほかでもないバーラムも合わせて逮捕しようとしているという。それを聞いて驚いたニールは、バーラムへの忠誠心に突き動かされバーラムを擁護する。

あなたの気持ちは理解できるが、インド人商人が阿片の取引から手を引いても何も変わらない。阿片は確かにインド産であるが、その耕作と貿易は殆どすべてイギリスの手中にある。しかし、ボンベイでは阿片の売買についてイギリスは独占できていない。その地域全体を支配しているわけではないからだ。だからインド人商人も参入できているに過ぎない。だが、そのもうけは、全体から見れば微々たるものである。だからバーラムが阿片取引を止めても、何も変わらない、とインド人貿易商の立場を説明する。(RS, p.452)

そしてニールは最後に残して置いた論点に言及する。すなわち、もしバーラムを逮捕者に加えたならば、「委員会」は、バーラムだけを差し出すだろう、というのだ。これまで友人として取引してきた中国人の命でさえ犠牲にしてきたのだから、という。

バーラムとニールは同じ省の出か？という質問にニールは否と答える。満州と広東ぐらい遠いところで、宗教も違う、と答える。では何故、あなたはバーラムにそのように忠実なのか、と聞く。ニールは、インドがもしイギリスの植民地でなかったならば、彼は先駆者や天才にさえなっていただろう。最良の人間さえ自分の真意に忠実に生きられない国に生まれたのは、彼の不幸である、と答える。それを聞いてチャン・ルー・シーの目に憐憫の情が浮かぶ。そして独り言のように、「林則徐がこれをやらねばならないのは、中国がインドのようにならないためなのだ」と呟く。ニールは、それを聞いて、「そうだ、だから私はあなたと、ここに座っているのだ」と答える。(RS, p.453)

### 林則徐のデントへの逮捕命令

このような経過を経て、次の日の朝、事件は急展開する。朝食中のバーラムのもとへヴィコとニールが駆けつける。デントに逮捕状が出たというのだ。容疑は、密輸、スパイ活動、中国での騒ぎを教唆した、というもので、役人は、デントを尋問の為に城壁の内部に連行するつもりだという。

バーラムは、急いでデントの住まいに向かうが、その途中、バーラムの袖を引くものがあり、見ると公行の大家ハウ・クア (Howqua) の一番下の息子が乱れた服装や髪をして彼に助けを求める。デントが逮捕に応じないと、林則徐は父親の首を切ると言っている、と言うのだ<sup>14)</sup>。

デントの住居の一階の薄暗い倉庫には人々が群がり、その真ん中には、むっつりとした表情



の役人が座り、その横にはハウ・クアとパン・ヒー・クアが首に鎖をまかれて身をかがめている。彼らの服装には乱暴に扱われたあとがある。

役人たちが、彼らに嘆願する姿さえ見かけたことのあるバーラムにとって、巨額の富を持つこの男たちが乞食のように役人の傍らに身を屈める姿は考えられない光景であった。しばらくしてバーラムは、部屋の他の側にはバーンハムやウエットモアやデントや数人の外国商人がいて、通訳に話しているのに気づき、彼らに近づく。バーンハムが、通訳を通じ、高官と交渉している。彼は、中国は、デントに対し司法権を持っていないと主張するのだが、高官は、皇帝の特命長官の命令に基づき動いていると言って取り合わないという。(RS, pp. 458-459)

通訳が、その場を交渉の為に去ると、デントは手のひらで顔をなでる。その顔色は青ざめ、爪には噛んだためにボロボロになっている。

バーラムがデントに声をかけると、口を利くことのできないデントの代わりに答えたのはバーンハムだった。聞きたいことがあるので城内に連れて行きたいそうだ。ヨーロッパ料理ができる料理人を手配するよう中国人商人たちに命じたそうだから長引くかも知れないという。それで済めばいいが、最後の晩餐の準備かも知れないという。

他方、通訳を介した交渉に業を煮やした高官は、直接、外国人商人の代表と話がしたいといい、二人の間に次のような会話が交わされる。

高官：あなたたちの国では外国人はその国の法に従う必要はないのか？

ウエットモア：いいえ、そのようなことはありません。

高官：では何故、中国の法に従う必要はないというのか？

ウエットモア：これまでそういう慣習だったからです。

高官：それが当てはまるのは、外国人が中国の法に従う限りである。我々は、警告に次ぐ警告を与えてきた。にもかかわらず、阿片船を中国の港に送り続けてきた。

ウエットモア：我々アメリカ人とイギリス人は、自分の国の法律によって一定の自由を与えられている。そしてその法律は、まず第一に、自国の法律に従うことを義務付けているのだ。

高官：他国の人々に害を与えるような行為を法律で認めるような野蛮な国があるとは信じがたい。それは自由ではなく海賊行為であり、いかなる政府もそれを許すことはできない。

スレイド：(業を煮やして会話に介入)あの男も自由とは何か、16ポンド砲の弾が自分に向かって飛んできればわかるさ、と通訳に言えという。

通訳：そんなこと言えません。

デント：それはそうだ。スレイドに一理あるのは、エリオット氏の介入を求めるときが来たということだ。

キング：しかし、これまであなたたちは、エリオット氏を広東から遠ざけたがっていたでは

ないか？政府の介入は、自由貿易の原則に反すると言ったのはあなたではないか？

デント：これはもはや貿易の問題ではなく、我々の安全の問題になっているからだ。

キング：政府とあなたたちの関係は、神様と無神論者の関係のようですね。危なくなると神さまに頼るわけですね？

ここで、通訳にどう返事をしたらよいか聞かれ、ウエットモア氏は、マカウにいる英国の代表エリオット氏に意見を聞かないと返事ができない、彼はじきにやってくる、と答える。(RS, pp.460-461)

そこへゼイディンがやってきて、バーラムの名前が逮捕者の名簿に最初載っていたのだが、二人の名前を挙げると、デントを残し、あなただけを差し出すだろうという判断で、外したのだろう、と言う。(RS, p.461)

その夜バーラムは、阿片を吸引し眠ろうとするが眠れない。神さまにも見放された気持ちになる。やがて目覚めて起き上がると部屋が葬儀の夜のように暗いことに気づく。祭壇のランプも消えている。次には、自分が天国への橋に足をかけているのだが、最後の審判を司る神に行く手をさえぎられているという幻覚に襲われる。わたしはどこに行けばいいのでしょうか、と自分が聞いている姿が浮かぶ。天使は、橋の下の暗闇を指さす。そして自分が、崖の淵を転がり落ち暗闇に飲み込まれる姿を見るのだ。(RS, p.462)

悪夢から目覚めたバーラムは、あの後どうなったのかをヴィコに聞く。彼によれば、通訳や仲介者からなる代表団にゼイディンを加えた人々が城壁のなかに初めて入ったという。ある寺の中庭に通された代表団に対し、高官たちは、何故、デントは林則徐の命令に従わないのか、広東貿易は大事ではないのか、と聞き、通訳が、デント氏の命がそれ以上に大事だからです、と答える。すると不思議なことが起きる。高官たちは、この返事が気に入りに、手を叩き始めたのだ。

そこへヴィコがあわてて部屋に入ってきて、窓の外を見てください、という。そとにはターバンを巻いたセポイの列が見えた。先頭に立つ男はユニオンジャックを掲げている。エリオット氏がやって来たのだ。ここ何日かの間で初めてバーラムは東の間の安心感を得た。(RS, p.464)

### 封鎖され孤立するファンキ・タウン

広東で騒ぎが起きているという情報を得て広東にやってきたエリオットは、デントをイギリス商館に匿い、外国人集会で、林則徐に対し旅行許可証の速やかな発行を求め、もしそれが許されないならば、戦争行為とみなすと言った。そして、すべての外国人に、荷物を船に持って行くように言った。エリオット氏は広東の外国人の撤退を決意したのだ。

しかし、時すでに遅く、商館は中国軍に掌握され、中国人の使用人がそこから逃げ出す。中

国人はそこにはいけないという命令がでたのである。ファンキ・タウンは、広東の町から切り離され孤立させられたのだ。そして、船着場でも変化が起きていた。三艘の船が並べられ、兵士が配置され、外国人が船で脱出するすべがなくなったのだ。全ては周到に計画されていたのだ。ファンキ・タウンの三つの大通りは全て兵隊によって封鎖され、夜になるとマイダーンには提灯が飾られ、広場は明るく照らされた。

アチャ・ホンでは食糧の点検を行った。すると水が不足しており、兵糧攻めを恐れていると、食糧が中国側によって配られる。(RS, pp.470-473)

翌朝、ニールがマイダーンに目をやると驚くべき変化が起こっていた。マイダーンは、一夜にして、500人の兵士が隊列を組んで行進する広場に様変わりしていたのだ。午前の中ごろまでにはマイダーンの真ん中にはテントが張られ、通訳団が陣取った。外国人が聞きたいことや不満があれば、それに答えるためのものなのだ。外国人に不愉快な思いをさせたくないからというのだ。沢山の公行たちは、商館の前に椅子を置き、あたかも、外国人に阿片の引き渡しを説得できなかったことの罰のようにそこに座らせられた。やがてかつての中国人の雇人が自警団の装いで現れ、マイダーンを警備している。マイダーンを歩くと彼らから罪人のごとく見つめられるのだ。昨日まで召使として扱っていた連中からそのように見つめられるのは最も不快なことだった。(RS, pp.474-475)

### イギリス領事館での緊急会議

そうした事態の急展開を受けて招集された緊急会議のなかでエリオットは、林則徐に書簡で行った旅行許可証の発行要求への林則徐の返答について報告する。(RS, pp.476-477)

林則徐の返事を直接引用する若い通訳の声を聞きながら、バーラムは不思議な気持ちに襲われる。それはあたかも林則徐がこの通訳の声に乗り移り、完全に理の通った、そして完全無欠の声で彼に語りかけているかのように思ったのだ。この林則徐という男は誰なのだ？何が彼にこのような権威と翳りのない確信を与えているのか、とバーラムは思った。(RS, p.479)

それを受け、この地域の監督官としてエリオットが発言する。林則徐は、船の積み荷を力づくで奪おうとしても武力で撃退されると見て、我々を人質にし、阿片を放棄させ、誓約書を取ろうとしている。つまり、林則徐は我々に罠をかけ、我々はそれにはまってしまったのだ。そこから逃れるのに一つしか方法はない。それは阿片を差し出すことだ。そして我々の命を守ることが私の第一の任務である、という。(RS, p.480)

これが大騒ぎを呼び起こすが、やがてスレイドが立ち上がり演説を始める。それを聞きながらバーラムは、エリオットが思っていたより頭が良いことに気づく。自分が言っても説得力をもたないので、スレイドを援軍として引きずりだしたのだと。

スレイドは、セネカを引き合いに出し、「外観にまどわされてはいけない」という。林則徐は、

この行為で外務大臣が必要としている宣戦布告の口実を与えているのだ、と言う。これを聞いて、その場の人々は黙ってしまった。そしてスレイドは、かつてオランダやスペインがイギリス臣民の財産を没収したが、その後、戦争になり、その結果、賠償金を支払ったという歴史的前例を挙げる。

するとキングがそこで反論する。林則徐の今回の措置と前例との間には決定的な違いがある、没収の対象となる阿片の密輸入は、40年間に渡り、中国で禁じられ、また、イギリス自身が死罪に相当する重罪であるとしている点である、という。するとスレイドは、「イギリスの法手続きに類するものはここには存在しない」と法的手続き論で逃れようとする。キング氏は、林則徐が禁制品の密輸業者を逮捕もせず、武力で禁じられた品物を没収したりもせず、何度も警告した上で、品物の引き渡しを要求しているだけなのが法の手続きに反しているというのですか、と反論し、また、「林則徐は、阿片の所有者を単なる個人としてではなく、集団として」中国政府の政策に反抗しているとしており、「集団的責任は中国の法手続きの根幹である」という。

するとスレイドは顔色を変えて、イギリスの法と独裁者の気まぐれを比較すること自体が恥ずべき行為だと反論し、キング氏が反論しようとする、会場全体が抑えにかかる。そこでキング氏も会場から退出する。キング氏が去り、会場が静かになると、デント氏が立ち上がり、スレイド氏の議論に賛成し、長年かけて交渉で成就できなかったことが軍艦と一握りの遠征軍で解決し、中国との貿易がより健全な方式で行えるようになるいい機会だという。そしてスレイド氏は、それに負けじと、中国との貿易がもたらす国庫とインドの歳入への膨大な貢献を指摘する。(RS, pp.482-483)

流れが自分の方に向いてきたことを知るとエリオットは、微笑みながら、我々の損失は取り戻せるのだ、という。

デント氏は、戦争ということになると、中国の守りの現状に詳しいものならば、わが軍の勝利を疑うものはいないであろう。そして勝利の暁には、我々の損失は利子をつけて返却されるだろうという。(RS, p.484)

そうした議論を聞きながらパーラムは、困っているのは自分一人だということに気が付く。英語で公的な場所でしゃべるのは好きではなかったが、胸の奥からこみあげてくる感情の爆発をどうすることもできず、「私は反対だ」と言った。「ここで折れてはいけない。そうすると、林則徐は何もせずとも勝利を取めることができる」と言った。

エリオットは彼にしては珍しく笑みを浮かべながら、「彼の勝利は長続きしない」という。しかしパーラムにとっての問題は、この航海で利益を得られなければ、自分は破滅する、という点にあった。彼には「時間がなかったのだ」。妻に対し、義理の兄弟たちが、この取引は危険だと言っただろう、おやじの遺産を浪費させてしまうべきじゃなかったのだ、という声が聞

こえてくるようだった。

少し待てばいいのだ、というバーナムの言葉に、誇りたかいバーナムは「自分にはその時間がないのだ」とは言えなかったのだ。バーナムにとって、2年の遅れは債務不履行を確実に意味し・・・破滅、破産、債務不履行者の監獄入りを意味したのだ。しかし、そのことをここで口に出すことはできず、彼は「はい、私の投資家は待ってくれるでしょう、と言った」。(RS, p.485)

黙ってイギリス商館を出たバーナムの後を追ってきたゼイディンは、「お金だけです。そしてじき返ってきます」、といったが、バーナムは、お金はたいしたことじゃない。じゃあ、何が問題なのですか、という質問に、バーナムは、私は魂をアーリマン（邪悪な精神）に売ってしまったのだ、しかし、それも何の役にも立たなかったと、答える。(RS, p.486)

「商業会議所」での議論の際に、身近なものを守る為にデントの提案に賛成してしまったバーナムは、そのことによって邪悪な精神に魂を売り渡したのだが、阿片が結局没収された今となつては、何の役にもたたなかった、という虚無感に捉われているのだ。そしてその虚無感は、それまでのバーナムをすっかり変えてしまう。彼は働かなくなり、食事ものを通らない。次世代を担うインドの若者たちがクリケットに興じている姿を見、彼らの新しい未来が沢山の人命の犠牲の上に成り立っていたことを果たして思いだすであろうか、と虚無感に捉われるのだ。

ゴーシュは、物語の結末の部分でキング氏が林則徐の招待を受け、大量に阿片が処分される現場を訪れる場面を描く。それは林則徐の勝利を象徴する場面であるが、キング氏は、それを大きな悲しみを抱きながら見る。というのは、林の勝利は長続きしないことが分っていたからだ。イギリスとアメリカの戦艦が数隻中国に向かっており、戦争になれば、その結果がどうなるのかには少しの疑いもなかったからだ。そこでキング氏はエリオット氏宛に、阿片が中国の人々に与えた害悪を綴った一通の書簡をしたためた。(RS, pp.502-504)

さらに、ゴーシュは、林則徐がヴィクトリア女王宛に書いた公開書簡の抜粋を掲載している。

#### 林のヴィクトリア王妃への公開書簡

天道は全ての人々に対し公正である。天道は、自らを利する為に他者を害することを許さない。人はどこに住もうと全て次の点において同じである：人は命を愛し、それを危うくするものを憎む。そして、(イギリス人にも、何が命をもたらし、死をもたらすのかの区別は理解できよう)。広東の港が開かれて以来、交易が栄えてきた。百二、三十年の間、広東の人々は平和で有用な関係を外国船と取り結んできた。

しかし、邪悪な外国人の集団がいて、阿片を製造し、中国で売り、利益を上げる為だけに、愚か者たちが自らを破滅させるようそそのかしている。その数はわずかであったが、今やそれ

は広く深く広がっている。従って、この悪徳を終わらせるために、阿片の販売者と阿片の吸引者を厳しく取り締まってきた。

この有害な品物はあなたの支配下にある土地の邪悪な人々によってつくられているようだ。もちろん、あなたの命令で造られたり、販売されたりしているのではないし、あなたの支配下にあるすべての土地で造られているわけでもない。聞くところによれば、イギリスでは阿片の吸引をその領土内において厳しく禁じているそうである。ということは、あなた方は、阿片の有害さをよく理解しておられるのだ。あなたの国で禁じられているのだから、それを他の国に売るのは悪いことではないのか？もし他の国がイングランドに（阿片を）持ち込み、売ったならば、その君主であるあなたが、それを嫌い、禁じるのは当然であろう。あなたたちは、自分が他人からしてほしくないことを他人にはしないことを美徳と心得ていると聞く。阿片の吸引を禁ずるより良いことは販売を禁ずることであり、さらに良いのは、根源を断つべく、製造を禁止することであろう。にもかかわらず、阿片を製造し、販売しつづけるとすれば、それは自分の命しか考えず、他者の命については、利益を得るためには無関心であることを示している。そのような振る舞いは、人間的感情に反し、天道にそぐわぬものである。(RS, pp.506-508)

このようにして、林則徐は、天道という概念を用い、対等・平等・公正な国際秩序という観点から、「自分が他人からしてほしくないことを他人にはしな」というキリスト教的黄金律の論理に反するものとして阿片貿易を批判し、中国が阿片を禁じ、その法律に違反した外国商人から阿片を没収した理由を述べたて、大義が中国の側にあることを明らかにしたのである。

小説の最後でバーナムは、阿片の力を借り、かつてパール河のボートの上でのチャー・メイとの逢瀬の思いでのなかに誘われ、アナヒータ号の彼の船室から海に入水し、最後を迎えるのである。

## まとめ

アマタブ・ゴーシュは、清の道光帝が阿片貿易根絶を決意し、林則徐を全権特命特使として広東に派遣するという阿片戦争前夜の緊迫した状況のなかで、外国人居留地内で繰り広げられる阿片貿易推進派と反対派の間の論争と事件の展開を外国人居留地の内部から描くことにより、以下のような観点から阿片貿易に絡む現実の諸相に切り込んでいる。

第一に、イギリス阿片商人たちが、「自由」という美名のもとに阿片を中国へ密輸し、莫大な富を手中にし、その為に中国に腐敗が蔓延し、人の命が犠牲になろうと意に介さない姿を描き、富への欲望の為に行われる「自由」の乱用をアメリカ人貿易業者で敬虔なキリスト教徒のチャールズ・キング氏を通じて批判した。さらにゴーシュは、イギリス人が自国では厳罰の対象とし、厳しく取り締まっている阿片の販売を中国では平気で行う背景にある当時のイギリス人の人種主義を描いている。

第二に、他方、麻薬廃絶を目的に中国の道光帝により全権特命大使として広東に派遣された高級官僚林則徐が、清廉潔白な振る舞いと国際的にも通用する堂々とした論理と見事な策略を通じ、阿片貿易商とイギリス監督官のエリオットを広東に閉じ込め、武力を行使せず中国の法に基づき阿片を没収する過程を描いた。結果的に、それは英国の中国への宣戦布告の口実を与えることになるのだが、長期的には阿片戦争をイギリス史の汚点とする後世の評価につながったのである。

第三に、そのような阿片貿易を巡る大きなキャンパスのなかに、インド人のパーシ貿易商バーラムの50余年の人生の物語を挿入した。バーラムは、海外に新たな生活の場と自由を求めたインド人、とりわけパーシ教徒ビジネスマンの系譜に属する。

バーラムは商売に失敗し借金返済の最中に病死したパーシの子であった。彼の母は、針子として貧しいながらもバーラムに基礎的な教育だけは受けさせた。バーラムに幸運が訪れる。許嫁を不幸な事故で失い、結婚相手が居なくなった娘の為に婿を探していたボンベイのパーシのミストリー造船の社長に見込まれ、愛はないものの娘婿として家に迎え入れられたのだ。バーラムは家業の造船業の才能は皆無であったが、若い頃に広東の阿片貿易で成功し、家業に貿易部門を付け加え貢献してきたのである。バーラムに阿片貿易に関わることへのためらいが無かったわけではない。だが、イギリスの支配下にあったインドにおいてボンベイの阿片貿易は、インド人商人が参入し成功し得る数少ない分野であったのだ。そのような家業への貢献にも関わらず、バーラムはミストリー家では、「飼い犬に手を噛まれる」ことを恐れた妻の兄弟たちから絶えず猜疑の目で監視され窮屈な思いをしていた。

そのようなバーラムにとって広東の外国人居留地は、狭いながらも魅力に溢れた別世界であった。とりわけ、貧富の差、カースト、宗教、言語、地域等の違いによって幾重にも人々が分断され対立させられる祖国とは対照的に、広東の外国人居留地のなかのインド人館ではそうした違いを乗り越え、皆インド人としての意識を持ち、団結し暮らせたのである。それは後にネルーが独立後の祖国に抱いた夢を先取りしたような場であった。

そしてバーラムは、外国人居留地で、優れた貿易商人としての才能を発揮し、部下から尊敬を集め、自己実現と解放感と中国人女性との愛に生きることができたのであった。

しかし、義父の死によってバーラムの人生は大きな転機を迎える。妻の兄弟たちに引退を迫られたバーラムは、一世一代の賭けに打って出る。貿易部門を買い取り独立しようと決意し、借金で大量の阿片を買い込みこの航海に賭けたのだ。しかし、それは広東の阿片取引が通常の形ではもはや不可能になっていた時であった。焦ったバーラムは、イギリス人の阿片貿易商の誘いに乗り、阿片を自ら広東に持ち込もうとし、それに関わった知り合いの中国人が処刑されることになる。彼は、イギリス人の阿片貿易商とは対照的に、その中国人を自分が殺したような罪悪感に捉われ、死んだ中国人の亡霊に取りつかれる。かつ、外国人居留地での阿片貿易批

判を通じ、次第にパーシ教徒として阿片貿易を地獄落ちに匹敵する悪であるという認識に辿り着きつつあった。しかし、ボンベイの妻や子供身を守る為に、林則徐の要求に抵抗するスレイドの提案に賛成し、悪魔に心を売ってしまったのだ。しかし「それも無駄に終わり」積荷を全て失ったとき、彼は生きる希望を失ってしまったのだ。

## 注

- 1) 広東は、ヨーロッパ人の呼び名で、中国語では Guangzhou (広州) と言う。1700 年から 1842 年まで、広東システムと呼ばれた貿易方式のもとで外国に開かれた唯一の貿易港であった。広州は、南中国の大きな都市で古い歴史を持ち、ヨーロッパ人がやって来る 1,000 年前から行政都市、貿易港として栄えていた。cf. [http://ocw.mit.edu/ans7870/21f/21f.027/rise\\_fall\\_canton\\_03/cw\\_essay01.html](http://ocw.mit.edu/ans7870/21f/21f.027/rise_fall_canton_03/cw_essay01.html) この論文にはパール河の賑わいやその畔の外国人居留区とその背後の広東の街並みの見事な絵が何枚も挿絵として挿入されている。
- 2) ゴーシュ自身があるインタビューのなかで、それぞれの物語の独立性を認めている。  
“How a Novelist Recreates History, Interview: Best Selling Author Amitav Ghosh,” by Patrick Brzeski, *The Wall Street Journal*, March 8, 2012. <http://blogs.wsj.com/scene/2012/03/08/how-a-novelist-recreates-history/>
- 3) Mahmood Kooria とのインタビューのなかでゴーシュは、意図的にインド洋を彼の歴史小説の舞台として使ったわけではないが、振り返って見ると、「ベンガル湾、アラビア海、インド洋やこうした地域相互の関係や交わりに最も関心があったのだ」と述べている。  
[http://en.wikipedia.org/wiki/Amitav\\_Ghosh](http://en.wikipedia.org/wiki/Amitav_Ghosh)
- 4) [http://www.allposters.co.jp/-sp/Portrait-of-a-Young-Eurasian-Lady-Posters\\_i7686370\\_.htm](http://www.allposters.co.jp/-sp/Portrait-of-a-Young-Eurasian-Lady-Posters_i7686370_.htm)
- 5) 陳舜信『実録阿片戦争』中公新書 1971 年。
- 6) 例えば、ブリッジマンについて、「彼は広州の外人集団のなかにおいて、阿片貿易反対の旗頭をつとめた。・・・アメリカ系オリファント商会の招聘した伝道士であった」とされている。(陳：1973 年 (中) 風雪編 (Ibid. p.46)。
- 7) [http://en.wikipedia.org/wiki/Olyphant\\_%26\\_Co.#Morrison\\_Incident](http://en.wikipedia.org/wiki/Olyphant_%26_Co.#Morrison_Incident)
- 8) <http://en.wikipedia.org/wiki/PaRS,i> 参照。
- 9) “How a Novelist Recreates History” by Patrick Brzeski, *The Wall Street Journal*, Arts & Culture, Mar 8, 2012. <http://blogs.wsj.com/scene/2012/03/08/how-a-novelist-recreates-history/>
- 10) Ibid.
- 11) [http://en.wikipedia.org/wiki/Old\\_China\\_Trade](http://en.wikipedia.org/wiki/Old_China_Trade)
- 12) [http://en.wikipedia.org/wiki/First\\_Opium\\_War](http://en.wikipedia.org/wiki/First_Opium_War)
- 13) アダム・スミスは『道徳感情論』の冒頭で次のように述べている。「人間がどんなに利己的なものと思定されうるにしても、あきらかにかれの本姓のなかには、いくつかの原理があって、それらは、かれに他のひとびとの運不運に関心をもたせ、かれらの幸せを、・・・かれにとって必要なものとするのである。この種類に属するのは、哀れみまたは同情であって、それはわれわれが他の人びとと悲惨を見たり・・・するときに、それにたいして感じる情動である」。(水田洋訳 岩波文庫 2003 年)
- 14) 陳舜信の小説では、大商人の伍紹榮 (Howqua) は、盧文錦 (Punhyqua) とともに、「私の首に鎖を



かけて下さい」と自分たちから申し出で、外国商人にデントの引き渡しを訴えようとした、となっている。それは、一面では自分たちには大事な顧客として外国人の命は守ってやるべきであるが、彼らが阿片を売っている以上、それには限度があるという公行の間での申し合わせに基づくものであったと、されている。(陳：1973年 (中) 風雪編 pp.66 - 67)

## 引用文献

- Brzeski, Patrick, "How a Novelist Recreates History, Interview: Best Selling Author Amitav Ghosh," *The Wall Street Journal*, March 8, 2012. <http://blogs.wsj.com/scene/2012/03/08/how-a-novelist-recreates-history/>
- Chaudhuri, K.N., *Trade and Civilization in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750*, Cambridge University Press, Britain, 1985.
- Dower, John, "Yokohama Boomtown-Chapter One, Introduction," MIT, 2008. [http://ocw.mit.edu/ans7870/21f/21f.027/yokohama/pdf/yb\\_essay\\_01.pdf](http://ocw.mit.edu/ans7870/21f/21f.027/yokohama/pdf/yb_essay_01.pdf)
- Ghosh, Amitav, *River of Smoke*, John Murray, Great Britain, 2011. 本書のページ数は、eBook Edition を使用している。
- Sea of Poppies: A Novel*, FarraRS,traus and Giroux, New York, 2008.
- Lazich, Michael C, "American Missionaries and the Opium Trade in Nineteenth-Century China," *Journal of World History*, Vol. 17, No.2, University of Hawaii Press, 2006.
- 榎 奏邦, 「インド洋の歴史」海上自衛隊遠洋航海参加者に対する講演 (於ムンバイ港, 「かしま」) 在インド大使 2005年8月22日 [http://www.in.emb-japan.go.jp/Ambassador\\_Lectures/Ambassador\\_Lectures3.html](http://www.in.emb-japan.go.jp/Ambassador_Lectures/Ambassador_Lectures3.html)
- 陳舜信, 『実録 阿片戦争』中公新書 1971年。  
『阿片戦争 (上・中・下)』講談社文庫 1975年。
- 堂目卓生, 『アダム・スミス: 『道徳感情論』と『国富論』の世界』中公新書 2008年

(加藤 恒彦, 立命館大学国際関係学部教授)

## A Study of Amitav Ghosh's *River of Smoke*: with a Special Emphasis upon the British Opium Trade and the Principle of Free Trade

This essay discusses Amitav Ghosh's *River of Smoke*, mainly focusing upon the opium-related conflict in Canton between British traders and the Chinese government in the period just before the outbreak of the "Opium War" (1839-42).

Japanese observers in those days who knew what was happening in China, took it as a serious threat to Japan's national security as well, and it was this sense of the Western threat that later led Choshu and Satsuma to form an alliance to overthrow the old feudal regime and to establish the Meiji government under which to take the path of Westernization in a Japanese way.

Ghosh's decision to set the novel in Canton, just before the war, is significant because, firstly, it was the time of the struggle between the British opium traders and Lin Zixu, the Imperial High Commissioner sent by the Emperor to put an end to the Opium Trade in Canton, resulting in the glorious victory of Lin, who, with his exceptionally incorruptible character for a Chinese mandarin and with his brilliant tactical skill, was able not only to successfully trap the British in the foreign enclave in Canton, confiscate and then destroy more than 20,000 opium chests in the foreign ships, but also to make clear how the British traders, in pursuit of wealth, were selling in China a commodity prohibited by law in their own country, in total disregard of public welfare and people's lives, a contradiction which could only be explained by the racist assumptions held by the Europeans against the Chinese. Although it gave the British an excuse to start the notorious "Opium War," thus bringing about the utter humiliation of the Chinese dynasty, this was the short period in which China could make clear to the world on which side justice lay, thus making this war a disgrace in the Imperial history of the UK.

Secondly, it was the time when, in the face of the Chinese government's stronger measures against the opium trade, heated discussions occurred among traders in the Chambers of Commerce in the foreign enclave in Canton regarding how to deal with Lin, especially between Charles King, who strongly criticized the opium trade as a pious American Protestant Christian, and Scottish opium traders who, in the name of free trade, indulged in the pursuit of immoral and anti-social greed. These arguments are of particular interest to us in terms of understanding the anti-social nature of our contemporary Neoliberalism.

Thirdly, Ghosh could depict the attractiveness of the small foreign enclave in Canton, called

Fanqui-town. Fanqui-town was a special place, especially for Indians because it was only there that Indians from different places, caste, religions and with different languages, who would never have mingled with each other if they had been in India, could transcend such social and cultural divides as well as restrictions and freely work together as Indians and share common customs and food. It was like living in the independent India that Nehru envisioned much later.

Fourthly, Ghosh could also depict as a protagonist of the novel a successful Parsi Indian opium trader from Bombay, Bharam Modie. As a result of the conflict between Lin and the opium traders, Bharam lost not only his livelihood as a trader but also his soul as a Parsi and chose death at the end of the novel. Ghosh, by delineating the way Bharam was haunted by the ghost of Arrow, the victim of his attempt to bring the opium ashore himself, showed how his humanity turned against the opium-trader in him. From another point of view, his was the life of an ambitious and talented Indian businessman in the age of British colonial rule when Indian businessmen could survive only on British terms and the opium trade was the only opportunity open to Indian traders.

(KATO, Tsunehiko, Professor, College of International Relations, Ritsumeikan University)

